

刻翻『春城日誌』(三)

— 明治三七年 —

春城日誌研究會

今回掲載する箇所は、『春城日誌』(明治二八年—四二年)、三〇冊中の明治三七年分、二冊である。第一冊は一月より六月、第二冊は七月より一二月である。

建筆家の春城は、この年も『雅俗相半書』(三六年一月—三七年一月)四冊や、『寸陰換壁録』(三七年一〇—一二月)五冊その他、随筆、記録、控え類、五〇冊余を書き残している。

明治三七年は、日露間の風雲急を告げ、二月一〇日、ついにロシアに宣戦布告、日露戦争に突入した。金州、遼陽の占領、旅順総攻撃開始など次々と大陸における作戦が展開された。

そして、早稲田大学の教職員、学生、校友等でも軍務に就くもの百数十名、そのうち数名の戦没者を出した激動の年であった。

大学としては、創立以来約四分の一世紀を経過し、益々隆盛に向かった時代でもあった。学生数も四、〇七八名に達している。校舎や図書館、寄宿舎など施設も漸く整った。「大学定款」も、欧米諸大学のそれらを参考にして改正が行なわれ、維持員会、教授会、評議員会の三者で組織する制度となった。春城も鳩山和夫、高田早苗、天野為之、



東京専門学校幹事の頃の市嶋謙吉

坪内逍遙などと共に維持員に加わり大学の経営に参加している。

三、四五歳の円熟期を迎えた春城は、図書館長に就任して三年目に入った。気づかわれた病状も「……益々回復せるを覚ふ……」（二月一日）、「……幸にして宿痾軽快也」（十二月三十一日）と『日誌』に書き留めているように、回復にむかいつつあった。自愛しながらも、多方面にわたり活躍できた一年であったのである。この年の春城の活動ぶりを『日誌』と関連資料から紹介してみたい。

の内紛調停のために京都へ出かけ、帰京後、少し体調をくずし、熱海で避寒療養（一月二五日―二月九日）している。

三月は、早稲田大学越佐会（新潟県出身在校生、校友の同窓会）主催の公開演説会を早稲田大学大講堂で開催。大隈伯や佐藤正少将の演説、春城も会長として、越佐会創立（明治一六年七月）以来一七六回にわたる会の沿革を述べている。聴衆は、講堂に溢れ、盛況であった。（『越佐会略歴』）

四月は、越佐会々員と隅田川で、観桜船遊び会を催し、参会者三五名と共に、飯田町付近から乗船、仙台堀を経て

向島で上陸、百花園に憩うなど春の好日を楽しんでゐる。一方、戦時下を反映し、従軍する者の名前や、敵戦艦ペトロバウロウスク撃沈、司令官マカロフ戦死、敵の水雷で兵員輸送船金州丸沈没など新聞に発表された戦況を書き留めてゐる。

五月は青柳篤恒に誘われ、早稲田清韓協会の設立に加わり、賛助員となった。また坪内逍遙、千葉鋳蔵らと「……各種の図書に關し、其の専攻家の談話を聞き、一は文学研究ニ資し一は図書館の参考に供せん……」(五月三〇日)との趣旨で、図書館に同好談話会を作った。第一回(六月十二日)は、千葉鋳蔵「支那小説の日本文学に及ぼせる影響」、宮崎三味「上田秋成と支那小説」の講演会を開催してゐる。(「早稲田学報」)

六月は、大学部に商科が開講(九月)されるので、商品の標本を陳列して参考にするため、商品陳列室を図書館に開設することにした。そのための調査や陳列物の収集に、力を注ぎ、第一回締切の三七年度末までに一、七三七点(内寄贈一、七一五点)を準備してゐる。(「早稲田大学第二十三回報告」)

七月は、第二回同好談話会を開催した。西田葦波が「金瓶梅梗概」、佐々木信綱が「源氏物語評論」の講演を行った。また、高田学監を補佐して、職務、会計などの「規定」を立案した。

改定定款に基づき、新設された評議員会を開催、前島男爵を、その会長に推挙したり、第二回卒業式を行うなど、維持員として大学の運営に腐心するところが多かった。

八月は、蔵書数の調査を実施した。三一日現在の総冊数は、五三、三六二冊で、前年度比八、八七八冊の増加である。(「早稲田大学第二十二回報告」)

九月は、故川田剛博士の旧蔵書、百日紅園文庫、概数で、一四、〇〇〇冊の寄託を受け、整理に着手してゐる。

一〇月は、松平康国から、泰山の刻字中から選字した「名著大作」の拓本を贈られ、表装のうえ、図書館の扁額と

した。(現在も第一閲覧室入り口に掲げられている。)

大隈伯に陪従し、甲府の校友会に二九日から三一日まで出席した。

一月は、大学の公開講義が、毎日曜日に開講されることになり、図書館も六日から日曜に限り、公衆閲覧を開始した。

春城日誌研究会は、昭和五九年六月の発足以来、業務のかたわら、同好者の集りとして、『春城日誌』の解読、翻刻を行っているが、今回は第三回、明治三十七年分を金子宏二、酒井清、柴辻俊六、渡部輝子の会員で、紹介することができた。いずれ、まとまった分量について注記や索引を付け利用に供したいと考えている。解読力も、わずかつつ進歩したつもりではあるが、まだ難読箇所も多少あり、読み違いもあるのではないかと思われる。識者のご教示とご叱正をいただきたく、重ねてお願い申しあげたい。

(六二・七・二八)

春城日誌

昭和三十一年

五月

春城日誌研究会 同人より編輯部の編纂を乞ふ、題面を訂正す

(表紙)

特イ 4
1919
540

春城日誌

明治三十七年
一月以降

の来書ニ接す。

二日

晴。払曉下痢数次、蓋し大晦日以来暴食之祟と知らる。
坪内之書ニ接す。田原来訪あり。小林賢三、山田一郎之
書を齎らし来訪あり。中学杜団ニ大隈信常を加ふる件ニ
付増子来訪。同人より催眠術の施術を受く。顔面心経を
愈さんとて也。午餐を与にして別る。午後より家弟、

(ニ) 昆田、本田等交々来訪、夜に入り別る。本日親戚、
知友ニ賀章を發す。内藤久寛より磯浦吟藻(父、古稀の
記念にとて其の俳句を編輯せしもの) 巻巻を贈り来る。
今朝八時近衛公爵薨去。

三日

快晴。家族と祝杯を挙げたる後、參校職員と年始の挨拶
を交換し、高田、田原、田中と大隈伯を訪問して祝賀
し、午餐の饗応を受けながら例の快談を聴き、更らに前
島男を訪ふて帰へる。館員、門生等交々来り賀す。昨年
元旦ニ比すれば健康益々回復せるを覺ふ。来る七日、静
岡ニ於て校友会開(ニオ)会ニつき田原と共に出席ニ決
す。新潟肥田野宅より鴨吉双小包にて通送し来る。北堂
去の書面を領す。葬式六日午後一時也。賀状頻りに到

る。返書を出すに忙しく為めに半日を消す。晩間羽田智証来訪。各地より賀章到る。

四日

快晴。増子ニ簡し本日清松を訪ふて催眠術を施さんことを需む。勝又松四郎、越後の生鮭を齋らし来り、年賀をなして去る。午後より子女を伴ふて四谷〔二二〕に家弟の宅を訪ひ、年賀を為す。帰宅後増子、清松子を訪問せんとて来り話す。雅俗相半書を筆し夜に入る。三時三十分頃地震あり。夜に入り各地より賀章到る。

五日

快晴。尽日家居、「相半書」を筆して半日を消す。高田より来書あり、明日午後五時藤沢利喜太郎宅ニ旧友会を開くにつき余にも出席すべしとの申越也。直ちに承諾の旨を答ふ。晩間赤塚〔三三〕、江部、佐久間、和泉等の門生交々来訪あり。賀章到る。夜に入り高田并ニ真嶋桂次郎之来書ニ接す。

六日

快晴。今朝人を増子へ遣し清松子ニ催眠術施術の模様を

刻翻『春城日誌』(三) 明治三十七年一月

問ハしむ。結果亘敷方と報し来る。田中唯来訪、静岡行旅費請取。午後一時谷中天王寺ニ於て近衛公爵の葬儀ニ列す。夕刻より高田ニ招かれ其宅ニ晩餐の饗を受く。合客藤沢、原田慎治、田原、松嶋〔三三〕の四名也。松嶋は高田之親族にて始めて相見る。原田は三菱之鉦山技師として昨年夏迄佐渡に在り。トランスワール視察之為其後洋行し、目下は東京詰なりと云ふ。

七日

快晴。今朝田原、高田(俊雄)同伴、七時三十五分急行汽車にて静岡ニ出発す。同地ニ開く校友大会ニ臨まん為也。十二時着、青地外四五の校友出迎ふ。大東館ニ投じ午餐を果して後、浮月楼の〔四三〕会に出席す。田原と共に一場之演説を為し宴会に移り七時旅宿に帰へる。青地、森田(勇次郎)来訪あり。又伊藤市平の訪問に接し選挙談ニ時を移し、十二時寝ニ就く。今夜青地出京ニ付田中宛書狀を托す。

八日

快晴。今朝田原、高田と共に近藤壮吉を訪ふて久瀨を叙

す。森田来訪あり、相携えて浅間神社を拝し、臨濟寺を訪ふて一旦帰宅。更らに校友野賢造、真田治右(四ウ)衛門の案内にて久能山参拝の爲車を馳す。十二時半同所ニ着、直ニ登山社所ニ休憩、宮司より昨年来修覆の仕末等を聴き、参拝之後宝物を觀、豆腐屋ニ飯し直ちに帰途ニ就く。四時静岡之宿ニ着、同四十五分の最急行汽車にて出発、十時帰宅。

九日

晴。北堂より来信あり。肥田野畏三郎、家弟ニ書を与ふ。小樽の栗山よりジャガタ芋苓俵送り来る。日本橋辺に散策し(五ウ)春陽堂に絵はかきを買ひ、松山堂ニ雜書を觀て帰へる。午後家居、雅俗相半書を筆す。越後赤塚政作へ佃煮、わさび小包にて通送す。西条北堂より小包にて味噌漬一罐を通送し来る。

十日

快晴。紅葉山人訳鐘樓守二卷、印刷出来、早稲田大学より通送し来る。肥田野畏三郎来訪、同伴、近藤席五郎を訪ふ、不遇。家弟来訪あり。(五ウ)勝吉母死去ニ付香典

一円遣す。「雜筆」を筆し午後に至る。岩見鑑造の計に接す。鑑造は芝門前の漆屋にて日就社の株主也。坂本三郎、金子馬治、池田龍一の三人帰朝につき来る十四日四時より富士見軒ニ歓迎会を催す旨の通知来る。晚間昆田、江部来話。

十一日

晴。坂本三郎の書ニ接す。朝食後坂本を訪ふて無事帰朝を祝す。参校館務を処す。午後増子を中学ニ訪ふて帰宅。高橋(六ウ)公彬の計に接す。坪内より来信あり、熱海の近況を報じ来る。

十二日

快晴。十四日午後借楽園ニ北越中年会を開く案内来る。承諾を答ふ。坪内ニ答ふ。肥田野ニ簡し午後来訪をもとむ。参校館務を処す。坂口ニ書を与へ選挙之事を云々す。清松子之事ニ関し江部来訪あり。肥田野晚間来訪ニ付盃酒して談笑、明朝近藤席五郎を同訪せんことを約して別る。(六ウ)

十三日

快晴。宗家并ニ本泉より賀状到る。早朝肥田野と共に近藤席五郎を西片町ニ訪ふて話。雅三俗七録を筆して正午ニ到る。午後より参校館務を処す。清松子より十日大磯ニ転地、百足屋の別荘ニ在る旨之報至る。在澳直治より絵端書之消息あり。夜に入り小雨あり。

十四日

曇天。細谷要雄（校友）、増子の紹介にて来訪、日本石油会社の星野治作ニ添書「七」を付す。参校館務を処す。今夜富士見軒ニ金子、坂本、池田三校友之帰朝を祝する為宴会を開く。山田霜岳の書ニ接す。

十五日

曇天にて寒し。朝来俗七録を筆し、正午参校。大隈伯より電話にて召換を受け直ちに行く。伯曰く、昨日在京都本願寺新門主より君を是非よこせと電報し来る。惟ふに改革之結果、君を介して越後有力者に依頼せん為めならんと。依「七」って井上伯の改革か痛く老法主を怒らしめ反動の結果、新門主に全権を与へ、老門主は愈々退隠ニ決し、為めに井上伯并ニこれに比付する面々は一斉

に黜けられたる事情を語る。意外之請求なれとも切角伯へ依頼越せしこと無下にも断りかたく、兎ニ角明日出發と決し、帰校之上高田とも協議して帰宅す。江部を招て本願寺之事を話す。山田霜岳ニ答ふ。

十六日

小雨あり忽ち罷む。今朝六時家を出て七時三十分の最急行汽車にて京都へ発す。発するに臨み、東本願寺新門主に發電、今夜行く旨を告ぐ。亦柘家にも同様之通報を為す。車中知人なく丘博士の進化論を読み一日を消す。八時三十分京都ニ着、相良大八郎停車場迄出て迎ふ。相携えて柘家ニ投じ、東本願寺の改革談を聞き、十二時半漸やく寝ニ就く。

十七日

晴。大塚成吉、本願寺一件ニ関し前日来柘屋ニ滞在中なり。今朝訪問を受け暫時談話す。福田嘉三郎来話。十時相良大八、大塚成吉同道、新門主を寺ニ訪ふ。新門主病蓐に在り。今回之改革ニ関し大要の仕末を語り帷幄ニ参し改革之功を挙げんことを依頼あり。別席に於て米谷半

平、矢野嘉右ニ門、辻淡に会す。米谷は石川、矢野は岐阜の信徒にして這回之改革ニつき特「九才」ニ新門主に同情を寄せ前月来帷幄ニ参しつゝあるもの、辻は弁護士也。

此の席にて井上伯と大谷の間に取結びたる契約書并ニ鴻池銀行へ差入ある公正証書之写、其他一件書類を一覽す。本日事務総長に任せられたる篠原明順も席に來りて挨拶を為す。新門主と午餐を与にし、午後より米谷、矢野等と改革事件を協議し、要領を得ず。五時より中村樓の早稲田大学校友会ニ臨み、九時「九才」旅宿ニ帰へる。

十八日

昨日来寒氣頓に加りたるを覚しか、本日は午後より多少降雪あり。相良并ニ大塚來訪ニ付改革問題を議し、余は此際老法主をして管長の職を辞さしめ、全権を新法主に歸するにあらずんば到底改革を完成する能ハさることを切言す。午餐後相良同伴、新法主に面し一旦帰京之事を報す。新法主の秘書室に於て昨夜「二〇才」浅草別院の佐々木より篠原ニ充てたる電信あり、之れを觀るに九篠公の夫人と打合の上老法主に就き其の意思を叩きし処充分

整理之見込立されば老法主動くの虞れあり、此旨新門主に伝達頼むと云ふの親展電報也。到底老法主を閑地に置くにあらざれば常に動揺して已まざる状態に於て見るべし。四時議事堂前に藤田四郎を訪ひ、赤塚政一の件ニ付云々の依頼をなして旅宿に帰へる。晚餐後八時六分の最急「二〇才」行汽車ニ投じ帰京の途ニ就く。半夜降雪あり、箱根以西地上寸餘の積雪を認めたり。

十九日

九時三十分東京着、直ちに帰宅す。坂口五峰の郵便に接す。新潟市并ニ北蒲之選挙形勢を云々し來る。在東京相良大八郎より親展電報にて市嶋、白勢より代理人を差遣すべき旨依頼し來る。在欧島邸滝太郎の書ニ接す。夜に入り増子喜一郎、赤塚、江部、常世克「二一才」巴等來訪あり。今夜明進軒ニ学校之社員會あり、然るに帰京之後頭痛を感じる甚しく夜に入るも尊を出る能ハす、終に出席する能ハさりき。

二十日

晴。参校館務を処す。昨夜社員會の決定を聞く。曰く、

小山温を欧米法律教授実況視察と云ふ名目にて洋行せしむる件、学校維持員の外前島、三枝、中野、昆文、山英等を基金の管理委員ニ任命する件等なり。大隈伯を訪ふて本願寺の実況(二二二)を縷述し、今日の機会管長を新法主ニ讓るにあらずんば到底改革の遂行無覚束事、新法主の帷幕に相当の人物を置かされば不都合なる事などを論ず。伯よりも種々の談出で一時間余談論の末「不日大谷光瑩に再見し重ねて注意すべし」と伯の挨拶を得て別る。不在中池田龍一來訪あり。肥田野畏三郎の書ニ接す。俗七録に本願寺訪問の仕末などを筆し夜に入る。」

(二二〇)

二十一日

晴。廿五日大隈邸に於て学校評議員会之通知并ニ廿三日午後一時より梶田半古方にて新年発会之通知を受く。又来る廿八日偕樂園に於て坂本三郎之洋行談を聴かん為小会之通知松田金之助より何れも今朝到来。俗七録を筆し、午餐後参校館務を処す。在澳直治より絵はかきの消息あり。昨年五月中小生より送りたる書状は間違つて此

程入手したる趣申来る。不在中金子馬治来訪あり。紅葉山人へ貸付け(二三三)置きし唐本若干部返戻ニ付入す。細谷要雄来話。

二十二日

今朝少しく降雪、暫時にして晴天となり午後より烈風起る。参校館務を処す。俗七録を筆し夜に入る。晩間家弟来訪あり。前田仁太郎来訪、二十九日神田金清楼ニ岩船郡郷友会を開くニ付出席を請求す。諾意を表して還す。

二十三日

快晴。大寒に入りし為か兩三日来就寢後咳嗽甚しく昨夜も遂に服薬して漸く咳嗽を鎮めし次第、此分にては危険なきにもあらずと急に避寒旅行を思ひ立ち日ならず決行するに定めたり。寺崎広業より明廿四日新坂下伊香保楼ニ新年発会之案内到来す。参校館務を処す。一週間の暇を乞ひ熱海行を決す。一時より梶田半古之新年発会に招かれ行く。活人画之余興あり。晩間家ニ帰へる。赤塚、江部来話(二三三)。

念四日

晴。日曜。内人と日本橋辺ニ呉服類其他熱海行ニ付必要
品を購ふて帰へる。昆田文次郎来訪あり。杉田金之助ニ
書を投す。在熱海の坪内ニ書を与ふ。和泉を招き不在中
之館務を云々す。坂本三郎夜に入り来訪あり。家弟の書
ニ接す。

念五日

七時三十分新橋発最急行汽車にて発、国府津より例之如
く電車に乗り換え（二四才）十時半小田原ニ着、直ちに人
車鉄道にて発す。小田辺（四才）辺多少の雪を観る。寒気も意外
に厳なり。往々石浜辺ニ至る、雪ボツ／＼至り車中寒さ
に堪へず。三時熱海ニ着す。雪益々降る。樋口屋ニ投
す。主人曰く、如此之天候は七年來曾て知らざる所なり
と。坪内逍遙来訪ニ付對話、夕刻に至る。内子、児機、
信平ニ書を与ふ。

念六日

夜來の雪庭面に満ち、寒気甚し。寒（二四才）暖計を検す
るに室内三十五度、午後三時五十度迄昇り天氣漸く回復
ニ向ふ。坪内夫婦を露木に訪ひ、例之文学談にて半日を

消す。午後は宿屋ニ籠居し半日筆硯ニ親しむ。高田、田
原、在大磯の清松子ニ書を発す。又内人ニ簡して栄太楼
の廿納豆とよき茶を送らんことを需め、和泉へは近刊書
の通郵を托す。浴後体量を検す。英斤百三十八斤也（十六貫目）。夜に入り坪内夫婦ニ誘はれて英亭の寄に（二五才）落語を聞く。内人より廿五日夜十二時過、近隣に
火災ありし旨報じ来る。坂口五峰より、北蒲の選挙状況
を報じ来る。曰く、「相馬の態度今尚曖昧なり、然れと
も大勢は相馬を再選せず。唯た困却なるは佐藤伊助の起
たさる事也。此際貴兄の起つは容易なり。要は貴兄ニ運
動費の用意あるや否やに在り」と。

念七日

晴。朝六時半室内気温四十度。（二五才）書を裁して昆田
ニ与ふ。余の選挙一件ニ関し意見を問へんとて也。坪内
を訪ふて例のことく談論す。午後坪内夫婦と梅園を訪
ひ、園中白勢正訓に会す。帰宿後、校友江藤哲藏來話。
客散じて後避寒小録を筆し夜に入る。亦英亭の寄を聴き
九時帰宿す。

念八日

曇天、午後小雨あり。朝七時室内気温四十八度。書を裁して五峰ニ答ふ。千円(二六オ)以上才覚出来ぬ旨を申送る。白勢長訓を相模屋へ訪ひ、又逍遙を露木ニ訪ふて音楽論を聞く。避寒小録を筆し午後三時に至る。白勢来訪ニ付東本願寺改革之事を談す。骨董商、華山の美人図を携へ来り示す。和泉の書ニ接す。露伴の「珍膳会」(ママ、價)を読み悶を遣る。

念九日

曇天なれとも昨日来漸く暖気加はりたるを覚ふ。図書館より書籍二冊到来。骨(二六ウ)董商来り相阿弥、周文の幅を示す。坪内を訪ふて談話十二時に至って別れ、午後より亦坪内夫婦と同伴、伊豆山に遊び、相模屋に憩ふて四時帰宿。昆田の返書ニ接す。運動費を作るの困難を云々し、一昨年なりせば古川家にて余を助くる意ありし云々。今は主人病氣にて相談出来すと云ふ意外の事実を報じ来る。浴後避寒小録を筆し、早く寝に就く。

三十日

「(オ七七)」

(ママ、孝)光明天皇祭。今朝新潟の坂口へ発電、遺憾ながら逐鹿見

合ハす、可成丹呉推薦頼む旨申送る。昨夜熟考の結果也。内人より甘納豆と茶を送り来る。東京の寒気華氏三十度、沍寒当る可らざるを以ってしばらく帰京すべからずと申来る。図書館より来書あり直ちに答ふ。坪内夫婦を招き洋食の餐応を為す。坪内を余の旅寓ニ止めて半日文学談を聞く。午後より雨あり。避寒小録を筆し夜に入る。骨董商、竹の化石セ(二七ウ)る筆筒を携え来り見す。

三十一日

曇天。早朝より避寒小録を筆す。坪内より秋田産の梨、小田原の牛肉(コーンビーフ)を贈り来る。例之如く訪問して雑談十二時に至る。内人より衣服三枚小包ニ送り来る。右受取をかね細書を内子ニ投す。十二時過咳嗽の為日覚む。旬日前より咳嗽之加はりたるは寒気之ためか病勢の進みたる為か。(二八オ)

二月

一日

快晴。温暖春の如し。谷資敬（加治川一件ニ関し坂口五峰へ報酬之件）、早稲田大学（去る廿五日開きし評議員会決定之件）、江部淳夫（清松子病況）、昆田重三の書ニ接す。早朝よりレッシングの画趣詩味論を読む。坪内を訪ふて話し、午餐後又逍遙と散策を共にし梅園を訪ふて還る。避寒小録を筆し夜に入る。例之骨董商、閻魔の古像（ニハツ）など携え来り示す。入沢之方剂にて鎮咳薬を求め今夜服用、寝ニ就く。生憎隣房の夫婦客秘戦を試むこと多時、為めに妨害を受けて十二時を過るも安眠を得ず、天明に近づき漸く小眠を得たり。

二日

晴。昨夜不眠の為朝来不快甚し。谷、坂口、学校田中、佐久間、館員等ニ与ふる書状を認め半日を消す。内人より書状あり。みつの徑撃をお（二九ウ）こしたること、豊次郎方ニ男子出生の事を報じ来る。直ちに豊次郎に書を

与へて祝し、亦内子ニ書を投ず。午時坪内夫婦と洋食を共にす。坪内夫婦の宿、夜中喧噪甚しく昨夜は終に一睡を得ずと訴ふるを聞き、余の宿へ移転を勧め直ちに決行す。小野光景と宿の廊下に会し其室を訪ふて談笑す。朝田又七、坂口屋にある由にて来り会す。午後温暖、恰かも四月の候の如し。坪内と散策を与にし（二九ウ）今宮神社を訪ふて帰へる。今夜早く寝熟睡を得たり。通宵大風あり。

三日

小雨。朝来避寒小録を筆す。家信に接す。藤井忠太郎妻（内子の姉）一月三十日死去の趣につき取あへず吊詞を送る。藏原惟郭と話す。雨天につき尽日戸外に出でず逍遙と議論を戦ハして半日を消す。図書館并ニ留守宅へ郵便書を投す。午後七時室内寒暖計五十八度也。（二〇〇ウ）

四日十五日

晴。午後より天気模様変す。早朝より小録を筆し、飯後逍遙と相携へて横磯辺に散策し、例之如く談論ニ半日を消す。午後、四迷訳の露西亞小説を読み夜に入る。

六日

快晴。今朝之諸新聞紙は戦機の愈々切迫せるを報す。動員令下りたりとて滞在客中俄かに帰宅するもの今朝来少からず。佐久間鉄雄より書留状にて為替「(二〇〇) 領掌。図書館員より事務を報告し来る。小樽の上田重良より来信あり。坪内同伴梅園 = 散策す。斎藤庫造に邂逅す。目下相模屋 = 滞在中の父病気に付見舞之為来りしなりと云ふ。避寒録を筆し夜に入る。

七日

朝来雪模様、午時雹降る。朝後後逍遥と相携えて散策、伊豆山に抵て帰へる。内人の書 = 接す。図書館より二三の図書を送り来る。亦た宅より「(二二〇) 差出せる西洋菓子到来す。木彫古佛像并 = 鎧守(二十五菩薩) 壹個を購ふ。午後宿に在り避寒録を筆す。山田霜岳より小倉鎮之助の近状并 = 越佐新聞に掲載せる新潟県の逐鹿の情況等を報し来る。

八日

今朝の新聞紙は開戦のます／＼迫れるを報す。露公使引

揚の準備成ると報す。昨夜校友徳田秋江(浩司)来る。

朝餐後坪内と共に秋江を伴ふ「(二二〇) 梅園を訪ふ。正午秋江、坪内夫婦と食堂に洋食を与にす。午後秋江、其の主朝(マ・幹)の中央時論に掲載せんとして余に談話を請ふ。余ために所感を陳べて筆記せしめ、明朝一先帰京と決し、出発準備を為す。午前十時頃より降雨あり。江部淳夫の書 = 接す。

九日

曇後晴。今朝八時熱海を辞し、帰京之途 = 就く。十二時小田原 = 飯し、大磯 = 下車し、清松子の病を訪ふ。昨今益。「(二三〇) 軽快 = 而遠からず医師より遊歩を許可さるべしと云ふ。祝すべし。談話一時間にして別れて汽車に上る。六時半帰宅。在澳直治より三通之絵はかき到着す。不在中、村上専精来訪あり。新潟県旧同好会之件 = 付山口達太郎より来書あり。

十日

晴。今朝七時室内寒暖計四十度。東京の天候漸く暖氣に向へるを覚ふ。昨日来新聞号外頻々出で、旅順口并 = 仁

川ニ於て海戦あり、我軍大勝を得たりと」(二三ウ) 伝ふ。
午前家居。午後より参校、不在中の館務を処す。

十一日

紀元節。昨夜露国に対し宣戦の詔勅を発せられ、今朝の新聞紙ニ就て相談を得たり。朝来降雨あり。家弟来話。靈巖島より出発之汽船ニ托し熱海滞在之坪内ニ数点の骨董品を送る。同地に於て売却せん為也、坪内ニ果物を送る。又郵書を発す。江部淳夫来訪あり。

十二日

「(二三オ)

晴。浦塩の露艦南下、函館を襲へんとする状況ありと飛電頻々たり。参校館務を処す。学監と海戦の大捷を祝する上奏文奉呈之件を決す。午後落後生来訪に付上奏文之事を協議す。小山温之洋行を送らんとて同人二十余名、紅葉会ニ送別之宴を張る。在澳直治より絵はかき二十四枚を送り来る。

十三日

晴。落後生、戦捷賀表の草稿を齎らし来訪あり。参校、賀表奉呈之ことにつき」(二三ウ) 学監と協議す。又恤兵義

損金を学生より募るの件を決す。館務ニ付坂本三郎と話す。坪内より来状あり。早稲田大学の全景大写真一枚、学校より紀念として贈り来る。在澳直治に細書を投す。小林賢三より身上之件ニ付来書あり。細谷要雄来訪あり。昆田、山一に書を投す。

十四日

快晴。日旺日。尽日家居。記事なし。」(二三オ)

十五日

晴。早朝より村上專精来訪。東洋女子学校設立の件ニ付相談あり、十一時に至り別る。参校館務を処す。図書館書庫二階ニ据付之新架ニ図書を移すため半日忙殺せらる。薄暮帰宅。掃氣録を筆す。

十六日

午前家居。越佐新聞記者松林了願(校友)、通信員として不日従軍出發ニ付来訪あり。午後より参校館務を処す。本旧日」(二三ウ) 暦元旦にあたる。夕刻より雪降り終夜やまず。

十七日

晴。早朝より村上專精来訪。東洋女子学校設立の件ニ付相談あり、十一時に至り別る。参校館務を処す。図書館書庫二階ニ据付之新架ニ図書を移すため半日忙殺せらる。薄暮帰宅。掃氣録を筆す。

夜來の降雪銀世界を現出す。山田霜岳ニ書を与ふ。増子より佐藤伊助、衆議院議員候補を諾したる件ニ付來書あり。坂本三郎來訪あり、午餐を與にして談話ニ半日を消す。尽日家居、「雜筆」を筆し夜に入る。

十八日

晴。風あり氣候激寒。參校館務を処^二五^オす。坂本三郎、前島男ニ書を投す。坂本より絵はかき若干を贈らる。午後神保町辺ニ絵はかき其他日用品を購ふ。三田村太郎之書ニ接す。

十九日

天候回復、天氣殊に清朗を覚ふ。日進、春日無事到着を祝するため本日比谷公園に歓迎会の催しあり。朝來各戸国旗を樹つ。午後より児を拉して上野、浅草辺を散策す。高沢喜一郎より北蒲原の選挙始末を郵報し來る。晚間昆^二三五^ウ田來訪あり掃氣録を筆し悶を遣る。

念日

早朝より參校館務を処す。中頸城郡選挙一件ニ付前島男、高田と話す。坪内ニ書を与ふ。小柳大和、三田村太

郎に答ふ。帰宅後割記を筆す。大坂図書館より來廿五日開館式案内來る。

念一日

列風砂を捲く。日曜。新潟県頸城郡選挙紛糾問題につき朝來奔走す。^二三六^オ箕浦を訪ふ、不遇。増田を訪ふて協議の上更らに前島男を訪ひ、調停のため高田行を乞ふ。大略承諾を得たるにつき更らに増田と協議し頸城有志者と電信を以て交渉を開かしむ。高田を訪ふ、不在。家弟并ニ肥田野來訪あり。昆田を訪ふて、直治在外費用之件を協議す。

念二日

夜來雨あり、暴風罷む。増田義一、肥田野畏三郎の書ニ接す。參校館務を処す。在澳直治ニ細書を与ふ。在英島村^二三六^ウ滝太郎より絵はかきの消息あり。新潟新聞社の沢本与一、近日從軍に付來訪、記者招聘之事を依頼して去る。肥田野畏三郎ニ答ふ。

念三日

晴。学校へ書を投して二三の用を処弁し、中西屋書店を

訪ふて近着之洋書を観る。午後より落後生、江部、肥田野来訪あり。和泉を家弟方へ遣はし、斎藤一件ニ関することを処せしむ。金四十円也家弟ニ渡す。長田秋涛之書ニ接す。」(二七六)

念四日

曇天。参校館務を処す。頸城選挙一件ニ付前島男ニ書を投す。沢本与一、肥田野ニ書を与へて明朝訪問を需む。午後より丸善書店ニ図書を観る。五時より偕楽園ニ同人会を開く。佐藤伊助ニ書を与ふ。

念五日

晴、後雨雪あり。肥田野畏三郎来話。参校館務を処して正午に至る。感冒の気味にて気分甚た優れず、帰宅して(二七七)温臥す。沢本与一来訪ニ付新潟新聞記者之事を協議す。

念六日

雨霽。感冒少快を覚ふ。今朝之新聞は去廿四日、我海軍三たび旅順を襲撃したる報を伝ふ。而していまた詳況を伝へず。午後出たる新聞号外に依れば我海軍、旅順港封

鎖之目的を以って四隻の汽船を自ら沈没せしめたり、乗組員すべて無事、但し封鎖之目的を達したる否や判然せずとあり。我海軍の壮挙三歎激賞の外なし。尽日家居。春(二九七)城割記を筆す。午後五時五十分激震あり。

念七日

曇天、後雪となり尽日霽れず。参校館務を処す。二六新報号外を以って日韓協約の成立せるを伝ふ。「張膽明目集」を筆し夜に入る。末女風邪之処夕刻ニ至り急ニ痙攣を惹き起し医師を招き灌腸二次、漸く収まる。内人曰く、去月余不在中の痙攣に比すれば幾分軽しと。今夜又微震あり。」(二八九)

念八日

雪雨霽れたるも尽日陰鬱甚し。日曜につき終日家居。勝又来訪。もやし豆、小笠原のくわい、仙台の凍豆腐など齋らし来り贈らる。午後より家弟来訪あり。割記を筆し無聊を遣る。晩間昆田来話。新聞号外は本日平壤附近へ敵の騎兵現はれ我軍撃退の旨を伝ふ。これを陸戦の開始となす。

念九日

晴。参校館務を処す。午後高田を其の「二九」宅ニ訪ふ。坂本三郎控訴院判事ニ復職ニ関し石渡次官訪問の打合を為し帰宅す。肥田野より来書あり。小林堅三来り接す。従軍せる大木操、字品より発せる郵便到来す。」

(二九ウ)

三月

一日

晴。早朝昆田来訪あり。同人依頼之事ニ付菊池三九郎を訪ふて話す。参校館務を処す。午後より坂本三郎身上之事ニ付石渡次官を司法省ニ訪ひ多事談論、略々要領を得て別る。坪内熱海より帰京来訪あり。菊池より今朝依頼之鑑銘を撰び贈り遣す。直ちに昆田方へ送付す。

二日

雨。坂本三郎身上之件ニ付今朝金子馬治を訪ふ、不遇。参校館務を処す。金子を招いて坂本之事を話す。六日朝石渡同訪之事を約す。家弟転居の報ニ接す。坪内逍遙作

「桐一葉」目下東京座ニ於て演劇中ニ付同人間にて観劇会を催すの挙あり、其の通知ニ接す。夜に入り徳田秋江、近刊の中央公論を携え来り云々の談をなして去る。

三日

晴。風。参校館務を処し午後二時に至る。「三〇」家弟小兒順次病気の経過よろしからざる旨報あり。落後生来話。佐藤伊助より当選の旨電報ニ接す。夜に入り和泉、出版部より金円若干を持参し来る。学校より二十一回報告書到達す。

四日

快晴。参校館務を処す。帰宅後例之無駄書にて消悶、夜に入る。

五日

雨。参校館務を処す。江部淳夫来訪。宗家主人出京之事を報ず。坂本三郎「三二」を訪ふ、不在。内人を家弟方へ遣ハし、小兒の病を見舞ハしむ。金子馬治ニ書を投し、明朝石渡訪問之打合を為す。夜に入り坂本三郎来話。

六日

雨後晴。日曜日。早朝金子馬治を誘ふて石渡司法次官を越前堀之私第に訪ふて坂本三郎之身上を云々す。用済之上石渡を誘引、東京座の劇を観る。目下東京坐は坪内作の桐一葉を演しつゝあり。これ坪内作の舞臺ニ上る始とす。早稲田諸「(三二) 同人、此日観劇するもの五十余名、我当之且元、芝翫の淀君共に観るべし。夜に入り帰宅。

七日

雨霽。校友石黒定美来訪あり。新潟新聞に記者を要するにつき其の候補として招見せし也。参校館務を処す。坪内逍遙を訪ふて昨日観たる劇の評論を為す。帰宅後割記を筆し夜に入る。加藤館用にて来話。石塚三郎より妻の小照を郵送し来る。記「(三三) 者の件ニ付坂口ニ書とす。

八日

夜来雨あり今朝未収らす。午前三時前激震あり。小林堅三来話。割記を筆して半日を消す。一昨六日、我艦隊浦

塩を砲撃せし旨新聞号外出づ。参校館務を処す。石渡敏一の来信に接す。関口泰輔之件ニ付岡田猛熊ニ郵書を發す。

九日

晴。石黒定美より著書若干を論文の見本として送り来る。越佐会幹事「(三三) 通常会之件ニ付来話。参校館務を処す。本日月額之内五十円入手。新聞紙之号外は昨夜より今朝にかけ我艦隊大連并ニ旅順を攻撃しつゝありと伝ふ。割記を筆し夜に入る。

十日

曇天、夜に入り雨。参校館務を処す。帰宅後張膽日録を筆す。落後生、昆田重三来話。

十一日

雨。参校館務を処す。越佐会幹事と来る廿日開会之演説会并ニ通常会につき協議する所あり。真嶋叔母、坂口五峰、舎生会等の書ニ接す。張膽日録を筆し夜に入る。

十二日

曇。寒。今朝大隈伯を訪ふて廿日越佐会の演説会に出席

を乞ふて其の承諾を得、参考館務を処し四時帰宅。真嶋より加治川事件 = 付来書あり。曰く、去七日付にて県知事は組合区域画定并 = 創^(三三三)。立委員指命之件を突然取消したるは何故なるを知らず、京地にて事情相分らは返信を乞ふ云々と。直 = 真嶋 = 答ふ。又谷資敬 = 書を投す。

十三日

朝より雪ふる。日曜日也。本日寄宿舎に於て舎生会の発会あり出席す。昆田来訪あり。午後より在宅。張膽日録を筆して夜に入る。

十四日

夜来降雪あり、今朝庭前積雪三寸^(三四四)許。快晴のため正午に至るまで略々融く。諸新聞は旅順口陥落の風説を伝ふ。参校を見合せ、館員に簡して事を処す。三田邨太郎、千葉鈺蔵より来信あり。直ちに千葉に答ふ。午後より参校館務を処す。出版部事業縮少につき高田学監より云々の談あり。来る廿日越佐会演説会 = 下瀬雅允出席之旨申来る。越佐会幹事来訪あり。張膽日録を筆し夜に

入る。坂口より着京之報あり。^(三四五)

十五日

快晴。細谷要雄来訪、踵て坂口五峰来訪、時局問題其他新潟県の政況を話して去る。参校館務を処す。越佐会幹事と演説会之準備を為す。出席演説者、大隈伯、佐藤少将^(正)、下瀬雅允の三名と決す。張膽日録を筆し夜に入る。昆田文来話。

十六日

晴。肥田野畏三郎身上之件 = 付来話。参校館務を処す。内藤久寛 = 書を投し^(三五五)。事を問ふ。千葉鈺蔵の冀望 = 依り龍威秘書を讓る。帰宅後紅葉の病骨録を読み、張膽日録を筆し夜に入る。石黒定美 = 書を与ふ。且つ預り置きし草稿若干を還す。

十七日

曇天。朝来頭痛を覚ふ。肥田野身上之件 = 付近藤を内務省 = 訪ふ。出張中にて不在。佐藤伊助を訪ふて話す。栗原^(かなめ屋)を訪ひ、終に池之端琳琅閣を訪ひ、百万塔^(経本入、もと竹添井々)^(三五ウ)所蔵と云ふ) 老個を

購ふ。価八円也。これにて余は陀羅尼二種を有すること
となれり。金石策二帙不用につき琳琅閣に売渡、価二十
円也。帰宅後肥田野并江部ニ簡す。又真嶋ニ書を与
ふ。午後小久江成一枚用にて来訪あり。本日午後日蝕あ
り。三時十二分より漸初め五時二十六分にて終る。所謂
る金環蝕として太陽に即する面の小なるか為め其中
央のみ暗黒となりて恰かも金環のとき状を顯ハすもの
也。〔三六オ〕

十八日

朝来降雪あり。今日は彼岸の入なり。参校館務を処す。
午後より無聊甚し。例之雑筆を筆して悶を遣る。佐藤善
長、坪山良頭を伴ふて来り見ゆ。真嶋叔母君より来信あ
り。徳重富作腎臓炎に罹る。和泉を遣し容体を見せし
む。晚間江部来話。寝後、越佐会幹事某々来り見る。夜
来又小雪あり。

十九日

雨。参校館務を処す。出版部より近刊書、日本演劇史二
卷送り来る。小倉鎮之助帰京之趣にて来書あり。鳥居大

路よりはかき来る。

念日

雨後晴。日曜。本日午後より越佐会之演説会を開く。付
朝餐後直ニ参校、諸般之準備を為す。午後二時より開
会、佐藤將軍、大隈伯外二三同人の演説了り、夕刻よ
り清風亭ニ茶話会を開く。二十七八名集会。貞水之講」
〔三七オ談などあり。余も席上一場の軍器談を為す。十時帰
宅。本日不在中真嶋桂次郎出京、来訪あり。〕

念一日

小雨あり。春季皇霊祭。内藤久寛之答書ニ接す。真嶋早
朝より来訪あり、子息洋行之件ニ付云々之談あり。午後
より坂口五峰来訪、踵而小倉鎮之助来訪、其の身上之相
談を受く。客散する後、佐藤正を本郷弥生町ニ訪ふて昨
日越佐会之演説会」〔三七ウ〕ニ出席の勞を謝す。

念二日

晴。鳥居大路恕平来話。踵而加藤万作来訪あり。参校館
務を処す。越佐会幹事と会務を処す。細谷要雄に書を投
す。国井守蔵より子息学業の件ニ付来書あり。

念三日

快晴。參校館務を処す。玉川謙吾来り見る。午後より在宅。真嶋桂次郎来訪、歪酒して饗す。加藤万作を招いて筭^{ハツ}(三ハツ)を弾せしむ。夜に入り宴を撤す。藤井寅一郎の書ニ接す。又田中唯一郎より来書あり。

念四日

朝。朝餐後真嶋を旅宿関根屋ニ訪ふて話す。坂口、佐藤(伊助)を訪ふ、共々不在。松山堂書店ニ立寄書籍を観る。午後より參校館務を処す。函館之吉岡憲より来信あり。小久江成一より明治二年発刊の新聞數種を贈らる。江部淳夫と長子学業之件を協議す。結局今回之^(三ハツ)試験不結果を機とし、中学より退かせ、写真術を専攻せしむるに決す。午後より雨あり。本日不在中坪内雄蔵来訪あり。藤井より妻死去ニ付遺物を内子へ贈り来る。

念五日

雨霽。真嶋今朝六時発汽車にて帰国ニ付停車場迄行き送別す。在澳直治より絵はかきの通信あり(本月三日の発信なり)。坂口五峰を訪ふて予算會議秘密会の経過等を聞

き、辭して松山堂ニ立寄り二三^(三九オ)の雜書を購ひ帰宅。山一之書ニ接す。又明日早稲田出身代議士と梅川楼ニ会するの案内状到る。晚間雨あり。京伝の「いはでもの記」を読む。江部淳夫来訪。

念六日

晴。在澳直治より絵はかき消息あり。細谷某来訪。金曜會之通知到る。參校館務を処す。午時下谷琳琅閣を訪ふて耽奇漫録(写本)を購ふ。小林尽太郎母の訃に接す。山岸岩根来訪。越の雪を贈らる。和泉を勞して飯^(三九ウ)田町辺ニ借家を搜索せしむ。今夜梅川楼ニ校友代議士の招宴會あり、行かず。

念七日

雨。今朝細谷要雄身上之件ニ付内藤久寛を樋口屋ニ訪ふて話す。又坂口五峰を訪ふて對話十二時ニ至る。午後小林尽太郎を訪ふて不幸を吊ひ、葬送下谷稻荷町龍谷寺に抵る。帰路琳琅閣ニ立寄古玩を観る。終に淳化閣帖を以つて銅劍と交換す。此の銅劍は^(四〇オ)竹添井々の藏弄にして箱書には西夏銅劍とあり、古色掬すべし。不在中

青木敬三、徳重富作、山口拳直（石渡敏一紹介にて）来訪。家弟も亦来る。

念八日

小雨。寒甚し。彼岸後の不順可驚也。今朝池田龍一（坂本身上之議ニ付）を望雲館ニ訪ふ、不遇。参校館務を処し午時帰宅。去る廿七日我艦隊閉塞船四隻を率ひ、旅順口に於て第二回閉塞を試みたる趣敵方の公報達す。而して我公（四〇ウ）報未だ発表せられず。五時より坂本町銀行倶楽部に於て金曜会を開き、河東田経清の拓植銀行理事として北海道へ赴くを送る。又今夜酒匂常明（農務局長）并ニ田中海軍少佐の講話ありたり。九時半帰宅。野沢武之助、国際法事務担当、不日渡韓之趣を報じ来る。

念九日

晴。参校館務を処す。青木敬三来訪。池田龍一を訪ふて話す。島恒四郎、興三（四一オ）郎遺骨を護して帰省ニ付来り見る。古田良三母の訃に接す。山口拳直来訪。金子馬治弟を養子ニ貫ひ度云々之談あり。玉川（謙吾）、赤塚、真嶋、佐久間等交々来訪。小児等学業成績につき増

子の書ニ接す。

三十日

快晴。参校館務を処す。午餐後内子と共に番町の貸家を見る。古田良三養母死去ニ付葬儀に列する為高縄泉岳寺に抵る。時刻少しく後れたる（四一ウ）為衆既ニ散じて全く徒勞となれり。偶々長田の大森に居を移したることに思ひ到り、品川より汽車に乗り訪問す。幸に在宅、語り暮して晚餐之饗を受け、八時の汽車にて帰へる。角田真平より帝国議会紀念絵はかき到来。細谷要雄来訪。

三十一日

晴後陰。午前在宅、春城劄記を筆す。加治川件ニ付真嶋ニ書を与ふ。石渡依頼、縁談の件ニ付金子馬治に書を投す。午後（四二オ）参校館務を処す。坂口、千葉、白勢（春三）の書ニ接す。小児学業之件ニ付増子を中学ニ訪ふて帰宅。細谷要雄を波多野伝三郎ニ紹介す。市原横浜市長より横浜水道誌を贈り来る。晩間小児を伴ふて神田辺ニ散策し、宝亭ニ洋食を喫して帰へる。江部来訪ニ付機学業の件を托す。（四二ウ）

四月

一日

曇天。参校館務を処す。池田龍一と話す。校友中嶋弥、長野県松本より出京、来話。午後帰宅後腹痛を感じ下痢二次、温臥加養す。

二日

曇天。肥田野畏三郎の書ニ接す。在西条の北堂より郵便到る。国井守蔵来訪あり。参校館務を処す。大木まさ、明日帰郷に付北堂へ金子入書状并ニ丹(四三オ)呉へ進物を托す。

三日

晴。大祭。近藤席五郎を訪ふ。肥田野身上之為也。坂口を訪ふ、不遇。帰宅後坂口来訪あり。午後一時より早稲田実業学校第一回卒業式ニ臨む。山本達雄、小笠原長生(海軍参謀少佐)、大隈伯等の演説あり。杉山令吉と話す。児機、写真術研究ニつき佐藤華江へ紹介を坪谷善四郎ニ托す。肥田野ニ書を与ふ。天氣漸く回復、暖氣頓に

加ハリたるを賞ふ。夜に入り坂本三郎来(四三ウ)話。

四日

雨。参校館務を処す。石渡敏一、国井守蔵ニ書を与ふ。越佐会幹事と来十日観桜舟遊会之事を協定す。不在中佐藤伊助来訪あり。小児二人種痘。細谷要雄を昆田ニ紹介す。肥田野より来書あり。晩間国井父子来訪あり。

五日

昨夜来の雨未霽れず。参校館務を見る。越佐会之事を処す。不在中白勢友(四四オ)弥来訪あり。来る十日大隈信常方にて園遊会之案内来る。

六日

晴。国井来訪。参校館務を処す。実業学校ニ天野を訪ふて白勢之件を話し、同人へ郵書を投ず。亦国井ニ書を与ふ。市嶋直治ハンガリー旅行先より発したる絵はかき到来。午後吉田落後來話。

七日

好晴ニ乗じ朝来車を駆り江戸川を經、上野の桜花を觀る。参校館務を処す。(四四ウ)午後早稻田中学の評議員

会ニ列す。細谷、江部、越佐会幹事京都の校友南浮等来訪あり。半峰と長田の身上を話す。北堂より来信あり。

八日

晴。白勢友弥之書ニ接す。国井守蔵、石崎佐一郎来訪。

北堂より小包にて「ホシカブ」沓包差遣ハさる。京華中学ニ磯江潤を訪ふて話す。転して石渡司法次官を司法省に訪ふて話す。坂本三郎之事ニ関して也。午後參校館務を処す。坂口、明朝(四五才)、婦県ニ付来訪あり。夜分国井来話。

九日

晴、風あり。參校館務を処す。郷人中野久衛外一両名来訪。同伴、大隈伯の庭園を観る。政客尺牘三十通の裝潢を表具師ニ托す。石崎佐一郎の書ニ接す。

十日 日曜。

晴。国井来訪、物を贈らる。石崎の書ニ接す。午前九時、越佐会員と飯田町停車場附近より乗船、仙台堀を經(四五才)て向嶋ニ出て、観桜舟遊会を催す。会するもの三十五名、墨堤の桜花正ニ満開、士女填塞。雑沓言わ

ん方なし。百花園ニ憩ふて再び乗船、午後二時柳橋より衆と別れ、佐久間、和泉と浅草辺ニ散策し晚餐を手にして帰へる。加藤、赤塚等来話。

十一日

快晴。寺崎広業より戦争画研究之為明朝出発、從軍之趣報し来る。小崎懋、柏崎へ全家移転之報ニ接す。内子并ニ二児を拉(四六才)して上野に花を観、終に墨堤の花を賞し、「雲水」と云へるに普茶料理を喫し、午後二時帰宅。真嶋中太郎不日帰国の趣ニ付来訪あり。肥田野長三郎来話。石崎佐一郎ニ書を与ふ。

十二日

晴。參校館務を処す。恒四郎より津川の川魚若干を贈らる。夜に入り大江乙亥門、江部淳夫来話。

十三日

晴。三田村太一郎来訪あり。參校館務を(四六才)処す。午後、半峰と早稲田農園を訪ふて植物を購ふ。肥田野来話。夕刻より偕楽園に催せる二水会ニ出席す。恒四郎来訪。長谷川文作の書ニ接す。亦同人よりぜんまいを贈ら

る。大江乙亥門の書ニ接す。

十四日

晴。神戸出先より田原之書到る。国井謙蔵、京華中学へ入学ニ付保証人となり証書を与ふ。参校館務を処す。千葉、長田、坂本三郎と話す。肥田野之書ニ接す。(四七〇)かなめ屋へ托し置ける常山の茶器、千葉へ譲りたるニ付かなめ屋へ書状を發して之れを報す。敵将マカロフの坐乗せる戦闘艦ベトロバウロウスク撃沈せられ、マカロフは幕僚と共に溺死したる旨、ルートル電報に依り新聞号外出づ。十七日春季運動会之案内来る。昂を数学教師森某ニ托し、正課之温習を為さしむることに付赤塚を森へ遣す。兩三日中実行之都合也。夜来雨あり。(四七ウ)

十五日

雨霽。参校館務を処す。帰宅後旗野八重来訪。春城劄記を筆し夜に入る。

十六日

雨。参校館務を処す。国井守蔵之郵書ニ接す。

十七日

晴。日曜。直治より絵端書之消息あり。田原栄来訪、神戸の土産を贈らる。徳重を招き館務を処す。家弟来訪。

午後より児等を拉して早稲田大学(四八ウ)春季陸上競技会を觀る。

十八日

晴。運動会後例年若干日休館之例ニ付参校せず。午前第百銀行を訪ひ又松山堂ニ書籍を購ふ。午後より又館用にて有斐閣、中西屋を訪ふ。夕刻より京都校友藤原忠一郎を紅葉館ニ招飲。七時半頃激震あり。

十九日

雨。肥田野ニ書を与ふ。加藤、和泉を招いて館務を処す。夜に入り坂本三郎来訪。(四八ウ)控訴院判事ニ復職挨拶之為也。

二十日

雨。午前在宅、劄記を筆す。午後より参校、館員を会して館務改善、館員分課改正之事を伝達し、夕刻より上野梅川楼ニ開会之学校事務員慰労会ニ臨む。会するもの八十名、盛会。九時帰宅。直ちに就寝。不眠、二時に至

る。夜中外出之為定時寢所ニ入らざれば、いつも寝られず、さて／＼困ったもの。これを以つて見ればわればい「(四九才)た病人状態に在ると覺し。

二十一日

雨漸く晴。昨夜不眠之為気分よろしからず。朝来軍国雜俎を筆す。十時より参校館務を処す。増子来訪ニ付両児学業之事を協議す。帰宅後亦雜俎を筆す。疲労の為早く寝ニ就く。

二十二日

晴。参校館務を処す。有賀長雄と話す。池田龍一を訪ふて其の所蔵の絵はかきを品騰し、^(ママ・既)終に二十余种を貰ひ受けて帰「(四九ウ)へる。肥田野之書ニ接す。又、肥田野より池田天游著す所の「アラスカ氷山旅行」を贈らる。工藤行幹急病にて死去の報ニ接す。

二十三日

朝来頭痛甚しく嘔氣を催す。昨日の午食に食傷セしことく覺しか果して然るかことく胃部常ならず終日枕を離るゝ能はず。肥田野より贈られたるアラスカ氷山旅行を讀

み、晷の移るを知らず大いに「(五〇才)興味を感じたり。千葉鈺蔵へ本箱六個、其の使ニ托して遣す。要屋へ托し置ける茶器と共に若干金を以つて譲りたる也。関口泰輔来訪。国井謙蔵、江部等来訪。

二十四日

風。晴。日曜。参校事を処す。石川成章を訪ふ、不遇。芝桜川町ニ工藤行幹之死を吊す。松山堂ニ若干之圖書を購ひ、山田を訪ふて帰宅。午後家弟来訪あり。

二十五日

晴。烈風。朝来参校館務を処す。一ツ橋時代大学同窓会「(五月二日)の案内ニ接す。図書分類之件ニ付午後より和田万吉を帝国大学図書館ニ訪ふて話す。

二十六日

晴。烈風。朝来参校館務を処す。勝又松四郎の書ニ接す。千葉鈺蔵ニ書を投ず。館用にて石川成章を訪ふ、不在。軍国雜俎を筆し夜に入る。細谷要雄、加藤万作来訪。「(五一才)

二十七日

曇天。勝又松四郎の書ニ接す。參校館務を処す。石川成章、千葉鉦藏と話す。

二十八日

朝雨。正午近くより晴。内人と小児を携え、日本橋辺ニ物を購ひ、松山堂ニ書籍を見る。午後再び散策、兩國より新設の東武鉄道に乗り、本庄を経て亀戸に到り天神を賽し、三時四十六分の汽車にて帰路に就き、人形町玄治(五一ウ)横町菊水(ヤ)に飯し、夕刻帰宅。

二十九日

晴。早朝より參校館務を処す。直治より来信あり。二十八家の尺牘、装潢を托し置けるもの出来す。三軸にて料金四円二十銭也。我陸兵を載せたる金州丸、元山沖にて敵の水雷ニ罹り轟沈したる旨の凶電到達す。

三十日

小雨。朝餐後内子と共に散策し、終に神田を経て日本橋に出で、松山堂其他へ(五二オ)立寄り、天金に飯して帰宅。書を図書館へ遣し館務を弁す。増田藤之助ニ書を与ふ。(金門 在中) (五二ウ)

五月

一日

日曜。終日雨天。家居、無聊を極む。在澳直治より二通の絵はかき消息あり。午後谷資敬、加治川事件ニ付来話。小柳善四郎、新野某身上之件ニ関し頼談あり。九連城占領の新聞号外出づ。漆間博の書ニ接す。

二日

尽日雨霽れず。松山堂書籍を齎らし(五三オ)来る。法書十一冊評価之為相渡す。古田良三の書ニ接す。參校館務を処す。五時より田原同伴、有楽町日本倶楽部に開会之五二会ニ出席す。此会ハ南校以来一ツ橋頃迄之大学旧同窓之親睦会なり。会するもの七十名。此の会に於て意外の感に打たれしは会幹たる中隈敬藏か珍らしき来会者を挙げんとて園田、瓜生の両老と余とを指名したることに終に此の指名は後刻演説を促さるゝ伏線となり已むなく一場の懷旧(五三ウ)演説を為す。会食後石本陸軍次官(新六) 大学出身の故を以って来り会し、九連城占領に

関する快談を試み、一同耳を傾け快哉を呼ぶ。浜尾の発声にて天皇陛下の万歳を三唱し、九時過散会。

三日

雨霽。細谷要雄来る。踵て小柳善四郎、荒野亮太郎を伴ふて来訪。当分荒野を図書館ニ備入るゝこと諾す。近江の学生小杉佐喜蔵、商科大学へ入る志望にて」(五四才) 古我雅芳の添書を携へ来り接す。参校館務を処す。

四日

曇天。参校館務を処す。正午帰宅。直治より絵はかきの消息あり。児と共に神田富士見町辺ニ散策し、九段靖国神社内に米山丸付属之端舟(敵弾数個の痕跡あるもの)を見る。明日節句につき児等に与ふる物幾種を購ふて帰へる。校友石井数市、細谷要雄来訪。又小杉佐喜蔵、早稲田大学へ入学ニ付」(五四才) 保証人となる。昨夜より今朝にかけ旅順に第三回閉塞を行へる旨の新聞号外出づ。

五日

夜来雨あり尽日霽れず、鬱陶敷こと言はん方なし。参校館務を処す。青柳篤恒来訪、早稲田清韓協会設立の件を

云々す。自今其賛助員たることを諾す。真嶋仲太郎帰京、物を贈らる。小杉佐喜蔵来訪。午後より家居、軍国雑俎を筆し夜に入る。」(五五才)

六日

曇天。参校館務を処す。午後より児等と靖国神社参詣、本家より六日様御法事之菓子来る。九日午後二時大隈邸にて実業学校評議員会之通知を領す。旅順占領の第一着として我第二軍、遼東半嶋に無事上陸の新聞号外出づ。

七日

快晴。小林賢三身上のことにつき来訪。松木弘、松井郡治出京。羽田智証と共に」(五五才) 来訪あり。十二時明進軒に午餐を共にし、参校館務を処す。山岸巖根来訪、請求ニ依り坂口五峰宛添書を交付す。増子を中学に訪ふて機的事ニつき云々す。

八日

晴。日曜。仏暁激震あり。小林賢三、山一の書を齎らし来訪あり。午前家居、軍国雑俎を筆す。午後より小児

と共に浅草辺ニ散策す。吾軍鳳凰城を占領し、又遼東上陸軍、普蘭店を占領し」(五六五) 旅順口を孤立せしめたりとの報あり。晩間落後生来訪。小林賢三再来、来る十一日より図書館ニ備入之事決す。腹痛之為早々臥す。

九日

快晴。佐藤伊助を市谷加賀町宅ニ訪ふ、不在。参校館務を処す。午後二時より大隈邸に実業学校評議員会を開く。散会后高田と共に散策し、終ニ高田宅ニ晚餐の饗を受け、夜に入り帰宅。秋田の勝又松四郎ニ書を」(五六ウ) 与ふ。江部来り清松子の帰京を報す。

十日

晴。参校館務を処す。午後無聊、軍国雑俎を作り夜に入

十一日

快晴。参校館務を処す。学校出版の万葉集代匠記一部贈らる。坂本三郎より来ル十四日招飲之書状到来す。今夜二水会あり、差支ありて行く能はず当番幹事ニ付代任を昆田に托す。牧野と越佐」(五七オ) 会之件を談す。

十二日

晴。尽日烈風あり。朝釜後山一を訪ふて話す。松山堂ニ書籍を觀、十二時帰宅。午後真嶋信城、真嶋中太郎同伴来訪あり。龍門^(トウ)老疋を送らる。晚餐を与にして別る。

十三日

曇天。参校館務を処す。坂本、本田ニ書を与ふ。帰宅後雑筆を作る。

十四日

曇天。参校館務を処す。真嶋信城参観之為来館、同伴、大隈伯の庭園を見る。午後五時より坂本三郎ニ招かれ、雨中根岸之居を訪ふ。田中、金子、池田、杉田、塩沢の諸同人来会。十時家に還へる。

十五日

雨。日曜。松山堂来訪。早稲田叢書全部を売却す。価四十二円五十銭也、国庫債権の資ニ充てん為也。午後より牛込中町之貸家を見、田原」(五八オ)を訪ふて帰へる。小杉佐兵衛の書ニ接す。又山岸岩根之書ニ接す。加藤来訪。晩間落後生来訪、例之史談をなし時を移す。大江乙

も亦来る。

十六日

快晴。参校館務を処す。在澳直治より来書あり。松井郡治の書ニ接す。真嶋信城来訪あり。松山堂、昨日売却之図書引替に代金請取、講義録共々六十円也。礫溪雜録を筆し夜に入る。」(五八ウ)

十七日

晴。今朝内子同伴、真嶋信城を其の旅宿、通二丁目蓬萊屋ニ訪ふ。同伴、白木屋呉服店に物を購ふて後別れ、近日真嶋中太郎洋行ニつき其の餞別之品など購ひ、終に浅草辺ニ散策して午後三時帰宅す。真嶋桂次郎昨夜出京之趣を聞き、晩間関根屋ニ訪問、明夕余の宅ニ小宴を開らき、中太郎子洋行之祖道を為すニ付案内を為す。薪野亮太郎来訪。」(五九オ)

十八日

晴後雨。参校館務を処す。勝又松四郎の書ニ接す。明後日、真嶋中太郎洋行之途ニ上るニ付夕刻より宅ニ招いて送別之宴を張る。桂次郎、信城も来会あり。九時宴を徹

す。真嶋より泰西名画集(美術学校版)老巻惠まる。

十九日

晴。参校館務を処す。午後より松山堂を訪ふて一二の用を弁す。行形勝四郎、真嶋信城来訪あり。昆田ニ(五九シ)直治の来書を転送す。

二十日

晴。今朝之新聞紙は我海軍之大不吉を伝ふ。曰く、吉野艦、初瀬艦、一は衝突の為、一は敵の水雷に罹り沈没の不幸に会ふと。午前七時、機同伴、真嶋中太郎之洋行を送るため新橋に抵り、八時四十五分真嶋と共に横浜迄見送り、午後三時家に帰へる。真嶋洋行ニ付餞別として書翰箋、明治節用集、日本演劇史を遣す。」(六〇オ)

二十一日

参校館務を処す。

二十二日

晴。日曜。早朝真嶋信城来訪、今朝桂次郎突然帰県之途ニ就きし趣を告ぐ。信城同道、昆田を訪ふて話し、終に相携えて蔵多屋ニ午餐を共にし三時帰宅。久保田清治、

玉川謙吾不在中来訪。中村進午、塩沢昌貞、田中唯一郎
来訪。来る廿八日中村方ニ絵はかき展(六〇ウ) 覧会を催
すニ付余にも出席セよと案内を受く。家弟并ニ早川早治
ニ書を与ふ。

二十三日

晴。玉川謙吾、行形勝四郎来訪。熊倉操、宮川鉄次郎宛
添書を与ふ。参校館務を処す。近刊の早稲田叢書二部三
冊を学校より贈り来る。久保田清治の書ニ接す。真嶋信
城、明日京坂地方へ出発ニ付来訪あり。晚餐を共にして
別る。明廿四日六時紅葉館にて波多野(六一オ) 精一洋行
送別会、廿九日学校に於て日清協会発会之案内来る。

二十四日

曇天。在西条の北堂并ニ肥田野畏三郎より来翰あり。参
校館務を処す。在西条の北堂ニ郵書を投ず(父上三年忌
と御先祖百年忌とを併せ五十公野寺ニ法会を営む事、北
堂来月初旬帰京之件)。真嶋信城の書ニ接す。

二十五日

雨。金曜会之通知状来る。参校館務(六一ウ) を処す。数

日来自ら整理しつゝありし事務用分類カード、本日を以
つて整頓を告ぐ。坪内ニ書を与ふ。越佐会幹事と会務を
処し、来月例会之事を決す。帰宅後礮溪雜録を筆し夜に
入る。

二十六日

昨夜来の雨霽れず。午前九時坪内同伴、千葉鈇藏を根岸
に訪ふ。偶々宮崎三味も来り会し珍本の品騰(六一ウ) に半日を消
し、午餐の饗を受けたる後(六一オ) 相携へて浅草公園ニ
散策し、三時家ニ帰へる。内子報ず、例の橋本、又執達
吏を伴ひ突然来りけり。依て例の証書を示したるに直ち
に退出セリと。家弟并ニ山岸岩根の書ニ接す。和泉文三
来訪。

廿七日

曇天。冷。真嶋信城の郵書ニ接す。京都着を報する也。
参校館務を処す。絵はかき会之事ニ付中村進午より来書
あり。夕刻より上野精養軒(六一ウ) に於て金曜会例会を
開らく。大隈伯の経済談あり。又参謀本部付堀内陸軍少
佐の金州占領并ニ九連城陥落ニ関する講話あり。此日恰

かも金州占領の報到り、少佐の一時間以上に渉る講話は深く会衆の感動を惹起セリ。十時散会。

廿八日

曇。帰県後の真嶋桂次郎より来書あり。軍国雑俎を筆し半日を消す。午後より参校館務を処す。四時より中村（六三三）進午宅ニ絵はかき会あり。余も所持之絵はかきを携帯して臨席す。寛、倉地、清水証、山口、中村、池田等出陳之絵はかき帖数点を見る。数の尤も多きは中村、意匠の佳なるものに富むは寛なりし。晚餐の饗を受けて帰へる。不在中横井時冬来訪あり。直治の郵便に接す。前途一身の方針に關し詳細意見を陳述し来る。

廿九日

曇天。日曜。家弟来訪。礫溪雜録を筆し半日を消す。午後より参校、大講堂に開会の早稲田清韓協会之発会式ニ臨む。前島、大隈、添田等の演説あり。真嶋桂次郎ニ書を手ふ。

三十日

曇天。大掃除を行ふ。参校館務を処す。夕刻より坪内、

千葉と共ニ明進軒ニ会し、同好談話会を図書館之付属として来月初回を開く件ニ付（六四三）協議す。これは各種之図書ニ関し其の専攻家の談話を聴き、一は文学研究ニ資し、一は図書館之参考に供せんとて也。越佐会幹事と同会之事を処す。夜に入り江部淳夫来訪あり。

三十一日

晴。内子と小児を拉して神楽坂を散策し、終に汽車に乗り四谷に抵り電車に乗換へ、日比谷公園を徜徉し、松屋ニ呉服を購ふて帰宅。大坂発（六四ウ）真嶋信城の書并ニ北堂の郵便ニ接す。参校館務を処す。池田龍一を訪ひ小時談話して去る。（六五オ）

六月

一日

曇。小雨。白勢和一郎父死去ニ付吊詞を送る。参校館務を処す。

二日

快晴。参校館務を処す。坪内より自裁の草紙ちご外に野

菓くさくを贈らる。帰宅後軍国雑誌を筆し夜に入る。
典物之利子十円四谷へ遣す。」(六五ウ)

三日

快晴。参校館務を処す。真嶋信城、京坂之旅行を終り来訪。晚餐を与にして別る。

四日

快晴、暑熱漸く加へる。北堂より来信あり。玉川謙吾の書ニ接す。参校館務を処す。不在中林信来訪あり。真嶋信城明朝帰県ニ付来て別を告ぐ。夕刻真嶋を拉し、昆田と共に偕楽園ニ会食す。」(六六オ)

五日

晴。日曜。今朝六時発汽車ニて真嶋帰県ニ付上野迄見送を為す。山岸岩根来話。夕刻より富士見楼ニ於て越佐会を開き、来る七月卒業すべき学生之予餞会を開く。参会者三十五名。

六日

雨。参校館務を処す。昆田、新潟新聞、越佐新聞等ニ書状を発す。千葉鉦蔵ニ書を投す。」(六六ウ)

七日

夜来の雨霽れ、午後快晴を得たり。在西条の北堂ニ書を呈す。朝餐後内子と共に四谷を経て銀座通ニ出で、兎等之為め呉服を購ひ天金ニ飯し、松山堂を訪ふて帰宅。五時頃激震あり。

八日

曇。参校館務を処す。千葉、昆田、和田万吉等の書ニ接す。西条之北堂并ニ久へ衣類小包にて差出す。在澳直治」(六七オ)に与ふべき細書を認め未了了らす。今夜二水会を偕楽園ニ開らく。余も亦出席す。

九日

曇。真嶋桂次郎より来書あり。佐久間鉄雄妹病気危篤之為帰省につき告別之為来る。参校館務を処す。在澳直治ニ細書を投す。同好談話会之件ニ付坪内を訪ふて話す。此頃肺病に特效ありとて評判蓋然たる田、ウ、コギを貰ひ受け帰宅。礫溪雜録を」(六七ウ)作り夜に入る。

十日

快晴。暑氣漸く加へる。真嶋信城より来状あり出京中之

謝礼を陳し来る。参校館務を処す。岫巖占領の新聞号外
出づ。随筆四五枚を筆し夜に入る。

十一日

曇。本日より梅雨の期に入る。佐藤伊左衛門多額納税議
員ニ当選につき祝電を発す。清松子を中六番町之居に訪
ふて話す。佐久間鉄雄之書ニ接す。午後より「六八七」参
校館務を処す。越佐会新旧幹事と会務を処す。中井新三
郎同好談話会之件ニ付来訪。大坂水谷不倒より来書あ
り。加藤、江部来訪あり。

十二日

昨夜大雨あり、今朝罷む。坪内之書ニ接す。徳重来訪、
身上之事を云々して去る。日曜なれとも同好談話会第一
回を開くに付午餐後学校へ行く。千葉敏蔵、宮崎三昧出
演、第二回之事を評決して散会。波多「六八七」野精一独
乙留学送別会（十五日五時半より富士見軒に於て）を開
くの通知来ル。真嶋信城より濁川縞二匹、尺八二本、譜
二部（機、昂吹用として）を贈らる。随筆をものして夜
に入る。

十三日

雨。北堂より来書あり、帰京九月迄延引之事申遣へさ
る。参校館務を処す。真嶋信城ニ書を与へて贈りもの
謝礼を陳ぶ。館之書庫ニ預けある荷物を「六九〇」検し、
其の目録を作る。今日は第一号、第二号検了。

十四日

今朝内子と共に豊次郎家族を四谷ニ訪ふ。糸瓜（カウ）の苗を購
ふて帰へる。午後参校館務を処す。木邨糸市のことに関
し鈴木湊の書ニ接す。三時頃遽然雷鳴あり電降る。バル
ガリヤ旅行中之直治より絵はかきの消息あり。千葉敏蔵
ニ書を与ふ。

十五日

快晴。中川銑三郎、昆田文次郎の書ニ接す。参校館務を
処す。橋本の代人山口某来訪。午後より高等商業学校ニ
松崎蔵之助を訪ひ其の図書館を観る。六時より富士見軒
ニ波多野精一の独乙留学を送る学校同人会に臨む。浦塩
艦隊南下、沖之嶋付近ニ於て我艦と衝突し開戦中なりと
の電報到る。郷里より発したる佐久間鉄雄の書ニ接す。

十六日 曇天、午後に到り驟雨あり。参校館務を処す。

曇天、午後に到り驟雨あり。参校館務を処す。

十七日

晴。参校館務を処す。新野亮太郎母の謝状ニ接す。丹呉老人出京来訪あり、午餐を共にして別る。午後より家弟を農商務省ニ訪ひ、其の紹介にて商品陳列所主任中村〔アキヤマ〕に面し、其の案内にて一覽す。早稲田ニ商品陳列室を作らんとて也。浦塩敵艦来寇、常陸、佐渡〔セウツ〕の二商船沈没、輸送之陸兵多数非命に斃れたる凶変の新聞号外昨日に引続き頻々出づ。号外又云、沖之嶋付近（本日正午頃より）砲聲切りなりと。敵艦は昨日逸走セリと思の外我艦隊と会戦セシと見えたり。

十八日

風雨。新野亮太郎、古河鋳業会社へ入社之事ニ付来訪。丹呉より紫薇、松魚節を贈らる。参校館務を処す。〔七一〕 帰宅後京伝の黄表紙を読む。散余の蔵書中より本朝六国史、学校に任用ニ付讓る。

十九日

曇天。休日。朝来小柳善四郎、小林賢三、家弟等交々来訪あり。徳重来訪ニ付三十八年度図書館予算編成の件ニ付協議す。

廿日

尽日微雨あり陰鬱不愉快甚し。参校館務を処す。帰宅後水道軒誌を〔七一〕筆し、亦黄表紙を読み悶を遣る。帰国中之佐久間鉄雄夜に入り帰へる。

廿一日

雨霽。参校館務を処す。昨日来卅八年度図書館予算調整之処、本日略成る。丹呉老人来館ニ付館内を案内し、終つて大隈邸園を舘、宅ニ伴ふて午餐を饗し、三時相別る。千葉翔香を根岸ニ訪ふて同好談話会之事を協議す。亦〔七一〕京伝作菫蕪本教種、宮崎所蔵風流源氏物語を借りて帰へる。

廿二日

晴。参校館務を処す。波多野精一渡行ニ付告別之為来訪。小野寺文哉不在中来訪。午後丹呉老人を樋口屋ニ訪ふて話す。帰宅後、徳重館予算之件ニ付来訪あり。

廿三日

晴。久保田清治、松山堂来訪。参校館務を処す。学監と協議の上三十八年「(七二ウ)度図書館費壹万千八百円と決定。小野寺文哉、新発田銀行ニ対する余の借入金保証之件ニ付云々す。本日午後丹呉老人帰県之途ニ就く。晩間小杉某、赤塚来訪あり。波多野精一より病氣之為出発延期之報あり。

念四日

雨。参校館務を処す。帰宅後予算ニ違算ありとて徳重来訪ニ付擬議夕刻に至る。当直、宿直之規定「(七三オ)も予算案と共に決す。

念五日

曇。朝食後日本橋辺ニ二三の用を弁す。午後家居、書を読む。肥田野長三郎、日の丸商会を新設せしとて来訪。夜分落後生来話。

念六日

晴。日曜。昆田重三来訪。今朝之新聞紙、敵艦旅順口外ニ出で、戦闘の末、敵の戦艦一、我水雷に轟沈せられ

たりとの報を載す。児を伴「(七三ウ)ふて富士見町辺ニ散策し、遊就館陳列之武器を見る。不在中小柳善四郎、清水信太郎来訪のよし。午後参校館務を觀る。京伝の葦蕪本を見、夜に入る。千葉掬香より第二回同好談話会之件ニ付西田堇坡、佐々木信綱共々出席を諾したる趣来翰あり。

念七日

晴。暑熱大に加へる。今朝海相を其官邸ニ訪ふ。来月学校卒業式ニ演「(七四オ)説を請はん為也。面会を得ず。秘書官ニ其意を致して還る。清水信太郎を訪ふて木邨糸市の留守問題を協議し、参校館務を処す。長田忠一の書ニ接す。千葉掬香ニ書を投ず。松邨文次郎の来状ニ接す。学生を中学へ入学せしむる件也。細谷要雄、神戸郵船会社支店へ傭へられたりとて来り見る。不日出発の由也。

念八日

晴。午後より参校館務を処す。千葉より来書あり、直ニ答ふ。坪内逍遙と話す。来月一日校友会幹事会之通知ニ接す。美術学校より真嶋中太郎之件ニ付明朝出頭すべし

と申来る。赤塚を代人として差出す為、同人へ使を発す。

念九日

晴。午前家居、隨筆をものし半日を消す。江部来話。赤塚又美術学校へ出頭、真嶋退学の件ニ付云々す。内藤久寛、六月八日紐育着「七五〇」の趣、絵はかきの消息あり。午後より参校館務を処す。高橋謙三より近著を贈り来る。千葉の書ニ接す。第三軍小平嶋ニ上陸、二三の地点を占領したりとの号外出づ。

三十日

晴。暑熱大に加ふる。地震二次、干時九時頃也。遊就館之列品を觀、十二時ニ至る。山田霜岳を訪ふて還へる。真嶋桂次郎ニ書を与ふ。浦塩の「七五〇」敵艦今朝五時より元山を襲撃し、今尚砲撃中との号外出づ。」(七六〇)

(表紙)

春城日誌

明治三十七年七月一日以降

特イ4
1919
541

明治三十七年七月以降

一日

晴。炎暑甚し。去年は酷暑の最中フラン子ルの単衣で通せしかことしは最早堪へず、けふより麻の単衣を着す。例に依り雑筆五冊を作り、盛夏録と命して遊就館見聞録より書き始む。」(二〇) 在京都之中村進午より絵はかきの消息あり。端書は保津川の急湍を画きあり。進午博士昨今此川を上下し、涼を納れつゝありと見えたり。欣羨／＼。昨日を以って図書館を閉たるも事務は常のごと

し。十時より参館、二三の事務を処す。在西条の北堂より来書あり。丹呉出京中の謝礼申越さる。又清水信太郎、千葉鈇藏之来書ニ「(二)接す。風来山人の「長枕褥合戦」を読む。これは久しく其の名を開き始めて眼を経るもの、縦横の滑稽、人をして幾度か頤を解かしむ。蓋し一種消夏の具と謂ふて可。六時より清風亭ニ校友会幹事を開き、大会ニ提出すべき要件を決す。

二日

晴。今朝海軍省ニ出頭、過日申「(二)入れ置きたる海相卒業式ニ出席之諾否を問ふ。時節柄出席決しかたき旨の返答を得たり。帰途昆田を古川事務所ニ訪ひ正午帰宅。午後より参校館務を処す。田中唯と要件を協議す。木邨之件ニ付高田、清水(信太郎)に書を投ず。来る六日午後三時より学校に於て社員定式総会を開らき、引統更らに大隈邸ニ基金管理委員会を開く旨の通「(二)牒ニ接す。夜に入り小柳善四郎来話。

三日 日曜

晴。涼気秋の如し。佐々木義山身上之件ニ付来訪あり。

十時頃より小兒を拉して浅草ニ散策し、金田ニ飯し二時帰宅。牽牛花之苗を壇根ニ移植す。盛夏録を筆し夜に入る。「(三)加藤館用にて来訪あり。千葉掬香之書ニ接す。

四日

晴。午前より参校館務を処す。午後二時より図書館に於て第二回同好談話会を開く。西田菫坡、佐々木信綱の講演を聴く。西田は金瓶梅の梗概を語り第二十回に至り、佐々木は源氏物語を評論し、七時に至り散会す。佐野辰「(三)三、清水信太郎来訪あり。

五日

晴。炎熱ますく加ハる。盛夏録を筆し十一時ニ至る。内子と共に日本橋辺ニ至り橋頭のさゝ屋ニ嘯し、三井ニ呉服を購ふて帰へる。晩間又水道町を経て久世山の辺を散策し涼を納る。昆田重三、江部淳夫、清水信太郎来訪あり。「(四)オ

六日

晴。真嶋桂次郎之来書ニ接す。過日当方へ遣したる書状

ニ対する返書なり。参校、館員を会し当夏期休暇中整理すべき事務の分担を定む。午後より社員会を開らき十三日評議員会ニ附すべき議案に就て討議す。右終り、夕刻より大隈伯邸ニ大学基金管理委員会を開く。伯より晚餐の饗を受け、食後学監より基金ニ「四〇〇」関する報告をなし、九時散会す。波多野精一より九日洋行の途ニ上る旨通報し来る。

七日

晴。今朝高田を私宅に訪ふて学校会計事務之要件を話す。佐久間會計上之事ニ付来訪あり。午後参校館務を処す。若干之館員ニ増給之沙汰を為す。盛夏録を筆し夜に入る。細谷要雄、昆田文次郎来訪あり「五〇」り。

八日

午前十時頃驟雨あり。切めて半日程続けかしと思ふ間もなく罷み、雨後炎熱一層の甚しきを覚ふ。田原を訪ふ、不遇。坪内を訪ふ。偶々江口惣吉来り会し同席す。午餐之饗を受けて去る。江口は名古屋ニ有名なる貸本屋大惣之息子なり、鼓を学ぶか為め「五〇」昨今出京し居るよ

し。午後より田中正平縁談のことにつき、藤沢利喜太郎を諏訪町ニ訪ひ、多時談話の後別る。晚間高田来訪、明日同人ニ代り文相を訪問し学校卒業式ニ臨み演説を托する事、学校予算之件を協議して別る。夜来雨あり。

九日

雨。風。波多野精一、今朝六時之汽車「六〇」にて洋行の途ニ上るニ付見送之為新橋ニ抵る、田原来訪ニ付学校会計上の件（決算を十月ニ調製すること、予算ニ予備費を設る代りに自今狼りに予算外支出を為すべからざる件）ニ協議し、一二の案を立て、明日の会議に提供するの都合をなせり。卒業式之演説を乞はん為、久保田文相を訪ふて云々す。多忙之故を以つて応せず。更らに富井政章を訪ふて乞ふ。これも「六〇」明後日京都へ赴く由にて応諾を得ず。午後より参校館務を処す。江部来訪、かねて取調を托し置けるワイスマンの靈魂不滅説を説明す。増子喜一郎と話す。

十日

昨夜来風雨烈しく朝来戸を開く能はず、午後に至るもや

まず。佐々木義山、井伊巖本来訪。共ニ越佐学生にて早稲田大学を近く卒業セんとするもの。(七オ) 佐々木を近藤席五郎に介す。旗野蓑織來話。午後より参校、学監、幹事田原と共ニ予算決算之調査を為す。蓋平占領の公報出づ。十三日大隈邸に評議員会を開く通知來。盛夏録を筆し夜に入る。

十一日

昨夜徹宵大暴雨あり。今朝僅かに罷む。然れとも未だ晴を得ず、陰鬱甚し。盛夏録を筆し半日を消す。(七ウ) 午後より参校館務を觀る。加藤、江部等來る。夜來亦強雨あり、雷鳴さえ加はりて一時はすさまじき勢なりしが、天明と共に漸く罷む。

十二日

午前在宅、一二の館務を処し又盛夏録を筆す。北堂より小包來る。尽日客なく無聊を極む。(八オ)

十三日

晴。六月十一日附真嶋中太郎の消息ニ接す。六月九日、聖路易へ無事着之趣報じ來る。同人学籍之件ニ付東京美

術学校と交渉す。参校館務を処す。本日高等予科卒業生五百余名に卒業証書授与式を行ふ。右ニ付式ニ参加す。学監を輔けて二三規定の立案を為す。五時より例年之通り大隈伯邸ニ評議員会あり、蓋し改正定款ニ基つき新たに組織(ハウ)せる会なり。前島男を推して其會長となす。例のこたく晚餐の饗を受け、食後学監より諸般の報告をなして散す。干時九時半也。

十四日

快晴。館用にて帝国図書館ニ田中稲城を訪ふて話す。午後参校館務を処す。盛夏録を筆し夜に入る。

十五日

曇天、冷氣を覚ふ。新野かず、小杉佐兵衛より來書あり。桑原淳貫來訪あり。午後三時半より学校に於て第二十一回卒業式を行ふ。來賓大石正巳の演説あり。五時半式を了り、立食の饗宴例のこたく六時散会を告ぐ頃雨、例年卒業式当日は主客は炎熱に困むか例なるに本年ハ涼氣甚しく十数年來曾て知らざる所なりし。不在中坪内逍遙來訪(九ウ)あり。夜に入り徳重富作病状よろしからさ

る旨の報に接す。山川総太へ通知状を發せしむ。

十六日

曇天。落後生、赤塚来話。十時半頃激震あり。盛夏録を筆して午後に至る。四時より紅葉館に校友大会を開く。例年の通り大隈伯の演説あり。

十七日

〔10K〕

晴天。払曉地震あり。坪内来訪。新野亮太郎来訪。高橋謙三の書ニ接す。盛夏録を筆し悶を遣る。田中唯ニ書を投して事を托す。佐々木義山帰県ニ付告別之為来訪。

十八日

曇天、小雨の後晴。本日学校より百十八円領収（来月分館長給も此内にあり）。国庫債券、当月分百銀行へ納付。三十円貯蔵銀行へ預け、「(ニ)」廿八円三十錢増田藤之助辞書代渡す。内子と共に日本橋辺ニ物を購ふ。中元贈答之為也。中村進午より来書あり。晚間江部、赤塚等来訪あり。盛夏録を筆す。十七日、敵の二個師団摩天嶺を逆襲、我軍撃退の報、新聞号外ニ出つ。

十九日

快晴。山川総太、徳重病氣之件ニ付来訪。加藤、館用にて来る。井伊巖本の書ニ接「(ニ)オ」す。奥国の直治より六月七日発給はかきの消息あり。太平山占領、我軍大石橋に迫り勝利を得たる旨、新聞号外出づ。夜に入り地震あり。

念日

晴。本日も土用の節ニ入る。午前参校館務を觀る。午後三時頃強震あり。京伝の仕懸文庫を読み悶を遣る。岩手県花巻の松田純一郎并ニ前田仁太郎の書ニ接す。江部、赤塚来訪「(ニ)」あり。

念一日

快晴。桑原淳貫、館用にて来訪あり。洒落本を読み、懶臥半日を消す。洒落本も漸く趣味を感じるに様になつて来た。けふ読むた「部屋三味線」は普通男より女の情を推しはかる筆法を逆用し、女人をして男子の情を穿ち得てしむる処、変つた趣向なり。而かも男子の情を穿ち得て真に迫「(ニ)」するの妙あり。けふも亦一日外出せずして了んぬ。家居ほど廉価なるものはあらず、家居なる哉々

々々。赤塚、明日帰省するとして告別之為め来る。江部、例に依り長女より箏を教へりに来る。

念二日

快晴。盛夏録を筆す。軍国雜俎第五巻を製す。これは日露戦争に関する重要記事を記し、若くは新聞切抜を張りつけ他日の参考に資せん(二三)とするもの、開戦以来朝餐後の一課業也。而して今は積むて十有五冊に達セリ。午後より亦桐陰に臥して房情記、青楼小鍋立などのコンニャク本を読み半日の苦熱を忘る。晩間亦一九の「起承転合」「吉原談話」を読む。佐久間来り、今朝旗野蓑織戦地へ向け出発之趣を報す。実業日本社の通信を担当し「ダルニー」方面へ出かけた也。(二三)

廿三日

湿気満天、而かも雨を降らすに至らず蒸し暑きこと言はん方なし。帆足聴松、越後ニ赴かんとして紹介依頼之為来る。近作、大画牋の山水枚贈らる。佐々木信綱の書ニ接す。参校館務を処す。我軍遼陽を距る十八里、細河沼を占領セリとの快報ニ接す。家弟に簡して明朝来訪を

需む。午後五時頃より雷鳴あり。一時は天地を剪(二三)かんばかり凄しかりしか終に雨を降らすに至らず。後に聞けば市内落雷十数箇所ニ及び死傷者を生するに至りたりと云ふ。

廿四日

小雨。日曜。家弟来訪あり。田原来訪ニ付商品蒐集之為、名古屋外一二県へ出張之件ニ付協議する所あり。昆田来訪、文太郎保証新発田銀行より借入金之件ニ付云々し(二四)去る。午後飯田町ニ貸家を見る。絵(は)がきを購ふて帰へる。横井時冬来訪、図書館へ若干図書の寄贈を受く。晩間館員蒔田覚次郎来話。寝後、千葉鈺蔵母死去ニ付河村作三、高田之書状を齎らし来り、葬式之事を云々して去る。

念五日

朝来快雨あり。図書館へ書状を送り二三の用を弁す。小林堅三を招き(二四)商品蒐集之事務を云々す。早稲田中学より明日評議員会を開く旨之通牒ニ接す。盛夏録を筆す。江部淳夫来話。

念六日

晴。松山堂、若干の図書を齎し来り見す。千葉鉦藏母死去ニ付、八時同人宅を訪ひ、谷中葬場迄葬送す。十時より参校館務を処す。亦早稲田中学評議員会ニ臨み、同校寄宿舎存(二五オ)、廃之問題を商議し、他日完全なる塾舎を經營する迄現在之者は廃する事ニ決し、二時帰宅。盛夏録を筆す。我軍營口并ニ大石橋占領の報到る。外国船の露艦に拿捕せらるゝもの続々たり。

念七日

尽日湿気満天、蒸あつき事言へん方なく多少頭痛を覚ふ。蒔田覚次郎、館用にて来り見る。小兒を拉(二五ウ)して墨堤に徜徉し、百花園の秋草を観る。瓢箪棚の下に設けたる涼台に腰打かけ数碗の苦茗を嚥るも亦た夏時の一快也。浅草の金田ニ飯し帰宅。午後盛夏録を筆し悶を遣る。菊池三九郎より来書あり。

念八日

曇天、むしあつく午後より雷鳴小雨あり。田原来訪あり。十時より坪内を訪(二六オ)。伊国小説家ダヌン

チヨウ傑作「蕩児」の梗概を聞く。十二時帰宅。盛夏録を筆し半日を消す。

念九日

曇天。尽日睡気を覚え、幾んど端坐に堪へず、蓋し天候然らしむるなり。在奥国、豊山より絵端書(二六ウ)の消息あり。中学より兄の試験成績を云々し来る。夜来雨あり。

三十日

雨霽る、未だ晴天を得ず。江部淳夫、茅ヶ崎より発したる郵書到る。坂口五峰より着京の報あり、在奥、豊山より絵はかきの消息あり。真嶋信城より過般之地震、轟雷之見舞状来る。学校より早稲田大学創立之時ノ式場其他を写したる写真数葉を紀念之為にとて贈り来る。午後より驟雨あり。小説を読み夜に入る。七日発、在米聖路易、真嶋(二七オ)中太郎之郵信に接す。又河野駒三よりも来信あり。

三十一日

日曜日。坂口五峰出京、来訪あり。早川早治、昆田重

三、小柳善四郎等来話。十一時頃より驟雨あり、激雷天地に轟く。十二時頃に至り漸く罷む。旗野八重帰省ニ付告別之為来る。盛夏録を筆し半日を消す。松山堂より日本書記訓考十冊を齎らし来り」(二七七)見す。これは越後柏崎、関四郎太の著なり。知人関栄太郎の先人と見えたり。十八九年頃の版なり。即ち余か越後に在りし頃出版なりしものなれとも初めて見る所也。」(二八〇)

八月

一日

晴。早朝より外出、昆田文次郎を訪ふて話す。坂口五峰を樋口屋ニ訪ひ半日談笑、午餐を共にして別る。偶々清松子宿して樋口屋ニ在り、訪ふて其の近状を見る。近頃容態よろしからず、日々多少之発熱ありと云ふ。兩三日中大磯に赴く由ニ聞く。二時家に帰へる。家人報す、不在中桑原淳貫来ると。盛夏録」(二八〇)を筆し夕陽に至る。

二日

快晴。小林、和泉館用にて来る。本日学校庫へ若干の荷物ヲ托す(本箱二ツ、能代膳椀一箱、食器入大仕入箱、蓋に△印を附す法帖入桐箱壹ツ、都合五個也)。盛夏録を筆し正午に至る。小杉喜代造来訪。在米真嶋より聖路易博覧会彩色図一卷、郵送し来る。昨日」(二九〇)黒木軍、楡樹林子及様子嶺附近を占領せる敵を撃攘したりとの公報出づ。

三日

曇。十時頃より大雨あり。桑原淳貫館用にて来訪。午後より山田霜岳を訪ふ。又中西屋、松山堂両書店ニ館之圖書を購ひ、日本橋辺ニ一二の用を弁し帰宅。大関誠一郎召集ニ応じ不日出征之趣を報じ」(二九〇)来る。雑筆盛夏録五冊筆し終りたるに付例に依り更らに五冊を作り「凌暑録」と題す。栃木城占領の報至る。

四日

朝来小雨あり。昨夜来涼気秋の如し。学校より月額を受領す。凌暑録を筆し半日を消す。午後、児を拉して同心町の貸家を見る。神田辺ニ物を購ふて帰へる。海城」

(二〇オ) 占領の報到る。夜分九時頃大激震あり。

五日

今朝九時遠足会を企たて、子女五人、作久間、和泉等と共に先づ汽車にて四谷に至り、それより電車にて品川に達し、更らに電車にて大森に至り同所八景園を訪ふ。時正さに十二時、携ふる所の行厨をひらき、納涼三時間の後汽車にて帰途につき、(二〇ウ) 更らに電車にて上野に抵り、湖畔之蓮月に氷しる粉を喫しなから蓮花を観、夕陽家に帰へる。在西条の児より消息あり。山田霜岳の書に接す。夜に入り落後生來訪、例之史談ニ時を移して去る。

六日

晴。前日より引続毎朝児ニ課す。今朝も亦然り。凌暑録を筆す。市嶋範三の郵便ニ接す。範三ハ(二二オ) 余か分家の次男也。今、野戦第一軍第二師団歩兵第二十九聯第三大隊大行李附にて戦地にあり。書信に曰く、本年二月召集に応じ、朝鮮上陸以來無事清国に至り、鴨緑江を渡り九連城を経て鳳凰城ニ至り、又ノ前進、今や連山関

を経て五法関に前硝勤務中云々と。夕刻昆田來訪。新発田銀行より借入金之事ニ関して也。右は余より宗家ニ請求すれば宗家にて弁金致し呉るゝこと(二二ウ)に内決しある由にて、不日余より宗家へ請求之事ニ決す。夜分家弟(斎藤一件ニ付)、坂本嘉治馬(鴻池銀行より一万五千円借入ニ付保証人となる件)交々來訪あり。

七日

晴。暑氣大いに加ハる。羽田智証ニ簡して家弟对斎藤之要件を托す。新発田銀行件ニ関し谷資敬ニ書を与ふ。児ニ課す。午後児(二三オ)と共に神田辺ニ散策し、小年小説を購ふて帰へる。昨日旅順敵艦十四隻急ニ出港、我か偵察艦二隻を包囲して攻撃せんとせしを逆ニ吾れより襲ひ、終に庄迫して彼等をして遁竄せしめたる旨公報出づ。夜に入り横井時冬來訪あり。商科之事を話して去る。近江の小杉佐兵衛より坐蒲団地十枚を贈らる。小見寺一問太の書ニ接す(二三ウ)

八日

晴。児ニ課す。凌暑録を筆す。徳重富作、痛氣少しく快

方ニ向へりとして来り訪ふ。高橋謙三の書ニ接す。小見寺某ニ答ふ。今朝之新聞紙は山口大将、市川左団次の計を伝ふ。

九日

晴。羽田智証より事件結了云々の通知ニ接す。七月六日発、在奥直治より絵はかきの消息あり。渡辺又兵(二三オ)衛の計に接す。郷人小見寺一問太来話。凌暑録を筆し、児ニ課す。

十日

晴。山田霜岳紹介之鈴木喜太郎来訪。九月より館員ニ採用と決す。在西条北堂より来書あり。真嶋信城、増子喜一郎ニ書を与ふ。凌暑録を筆す。岡野敬次郎妻死去ニつき吊詞を送る。千葉鉦蔵の書ニ接す。(二三ウ)

十一日

晴。谷資敬の答書到る。江部淳夫の書ニ接す。早川早治(校友根本謹一郎身上之儀ニ付)、小林堅三(商品蒐集事務ニ付)、石井藤五郎館用にて来訪あり。午後より渡辺又兵衛葬送之為品川東海寺ニ抵る。坂本嘉治馬之書ニ

接す。洋行中なりし岡山県校友景山鍋吉、帰朝ニ付来訪あり。夜に入り小柳善(二四オ)四郎来話。

十二日

晴。児ニ課す。坪内逍遙を訪ふて其の新作「浦嶋」の朗読を聞く。十一時より参校館務を見る。午後より凌暑録を筆し夜に入る。十日旅順沖大海戦の詳報頻々、新聞号外を以つて発表せらる。(二四ウ)

十三日

晴。朝来蒸暑し。児ニ課す。関口泰輔身上之件ニ付来訪あり。医学天正記を読み、凌暑録を筆し無聊を慰す。去る十日の海戦に敵の海軍司令長官戦死の報達す。家弟数日来病臥ニ付内人をして見舞ハしむ。夜に入り落後生来話。

十四日

晴。殊に暑熱の甚しきを覚ふ。山田(三五オ)霜岳、真嶋信城ニ簡して事を托す。平田仲次郎来訪あり。我上村艦隊、浦塩艦隊と対馬海峡に於て交戦中との報出づ。踵て五時間戦闘の結果敵艦リューリックを撃沈し、他の二隻

に大損害を与へたり。我艦隊軽傷との公報来る。晚間田
原来訪あり。小樽の並木幾弥、判事を罷め弁護士開業の
旨報し来る。

十五日

〔二五ウ〕

曇天。山岸巖根来訪、菊花を贈らる。児ニ課す。凌暑録
を筆し無聊を慰す。

十六日

晴。参校、一二の館務を処す。中村進午、本田信教来
話。家弟より病氣回復之趣報し来る。児機病む。前田医
師来り診す。児ニ課す。校友三原義人の書ニ接す。〔

二六オ〕

十七日

晴。児ニ課す。小見寺一問太来訪あり。真嶋信城より三
旬紀程出版之件ニ付細書あり。横井時冬の書ニ接す。凌
暑録を筆し悶を遣る。小山妻、平田仲次郎縁談之儀ニ付
来訪、内子応接す。山田霜岳より関口泰輔之件ニ付答書
を得たり。勸降軍使を旅順敵軍へ差遣之趣公報出づ。

十八日

〔二六ウ〕

曇天。児ニ課す。読書三昧ニ半日を消す。午後家弟来訪
あり、軍使差遣之結果として敵は勸降に対しても、聖旨
に対しても拒絶の返答をなし来れる旨公報出づ。凌暑録
を筆し夜に入る。

十九日

晴。館用にて小林堅三来訪。真嶋信城より金五十円郵送
し来る。右は十月初旬返済之約にて借入れたるなり。〔
二七オ〕児ニ課す。景山鍋吉来訪、渡辺亨ニ添書を与ふ。
午後児と共に電車運動をなし、日本橋辺ニ物を購ふて帰
へる。中村進午の書ニ接す、直ニ答ふ。

念日

晴。児ニ課す。中村進午の書ニ接す。真嶋信城ニ書を投
す。読書三昧ニ一日を消す。晚間佐久間、関口泰輔之件
ニ付云々し来る。〔二七ウ〕

念一日

晴。日曜。景山鍋吉の書ニ接す。家弟来訪あり。児ニ課
す。凌暑録を筆して半日を消す。関口泰輔来訪あり。敵
艦ノーウエック号、樺太に遁れて百千歳、対馬に撃れ、

沈没ニ瀕セリとの報至る。晩間内子と神楽坂ニ散策す。

念二日

「(二八オ)

晴。児ニ課す。逗子滞在中之坂本三郎より来書あり。杉山令吉ニ書を与ふ。午後より落後生を訪ふて史談を試む。凌暑録を筆して夕陽に至る。家弟より熊本産乾香魚を贈らる。千葉掬香より来書あり、直ニ答ふ。

念三日

晴。児ニ課す。早川早治の書ニ接す。赤塚政一より生糸入小包到着。商品「(二八ウ)事務ニ関し小林堅三来訪あり。凌暑録を筆し半日を消す。林信来訪あり、踵て増子喜一郎来話。

念四日

晴。児ニ課す。田中唯井ニ図書館ニ書を発して一二の事を処す。内藤久寛、石沢兵吾ニ書を投す。又大坂の中井新次郎ニ書を与ふ。旅順陥落愈々切迫せる旨新聞号外出づ。小見寺一間太ニ書を投「(二九オ)し来訪をもとむ。九月以降館務之取調を為し半日を消す。本日都鄙の友人十数名ニ絵はかき入書状を発す。右は近日旅順口陥落の快

報に接せんことを期し、諸友に托して快報到達の日絵はがきを以って祝意を陳べしめ、此の絵はかきを以って振古未曾有の快事の記念となさんと欲するに在り。

念五日

「(二九ウ)

晴。児ニ課す。谷資敬の書ニ接す。(坂口へ謝物を遣したる処云々。余の負債百五〇百五〇同人へ返付し了る云々)。本月分国庫債券十円ツム二口、百銀行へ納付す。神田、日本橋辺ニ物を購ふ。学校より金弍十円受取。友人数名ニ絵はかき入書状を発す。旅順口陥落の日、之れか送付を得て記念となさん為め也。根本謹一郎(川崎町校友)、早川早治来訪。松山堂二三の書籍を携へ来り見す。」「(三〇オ)

念六日

晴。児ニ課す。谷資敬の書ニ接す。西条北堂より来月上旬康平同伴、帰京之趣報あり、直ニ返事差出す。谷資敬ニ答ふ。真嶋信城へ五十円送金云々の事を坂口五峰へ依頼す。石井館用にて来訪。桑原へ注文のカード箱出来ニ付齎らし来り見す。山本悌二郎の来書ニ接す。午後児を拉して散「(三〇ウ)策。新たに開通せる電車にて牛込より

四谷に往復す。これは東武鉄道を利用し、十分毎に電車を発するなり。貨錢并ニ乗込手続すべて鉄道ニ同じ。鉄車に比すれば一層快速にて愉快也。此の電車は目下中野迄通ず。晩間杉山令吉来訪、書談ニ時を移して去る。

念七日

晴。冷氣甚し。児ニ課す。小見寺来る。(三二) 増子并ニ本田信教ニ紹介す。登館事務を見る。田原を訪ふて十二時帰宅。来る三十日坪内銳雄(大石橋にて戦死)葬式ニ付香典金貳円遣す。関口泰輔、山一の世話にて岩手新報へ赴く事に決したりとて来り告ぐ。同人を大江乙亥門ニ紹介す。池田龍一より絵はかき消息あり。又横井時冬の書ニ接す。

念八日

曇且冷。朝来頭痛を覚ふ。在(三三) 塙直治より来信あり。中村進午より絵はかき消息あり。坂本三郎来話。夕刻千葉鉢藏来訪。相携えて神楽坂ニ散策し、明進軒ニ晩食を与にす。偶々塩沢昌貞も来り会す。遼陽開戦の報あり。

三十一日

念九日

曇天。頭痛愈えたれど少しく感冒の気味あり。児ニ課す。真嶋信城の書ニ接す。坂本三郎より絵はかきの消(三三)息あり、反故しらべに半日を消す。大坂中井新三郎より来信あり。在塙直治より三通の絵はかき消息あり。六月十日、余より発せし書状接手の趣報じ来る。徳重病氣之処本日午後八時頃心臓麻痺を越したるに付応急の手当を施したる処落つきたる旨和泉来り報ず。既に十二時過、和泉、門を叩き来り報じて曰く、徳重十一時半頃終に逝くと。依つて山川総太へ人を馳せ、其他一二の件を処して臥(三三)す。

三十日

雨風。今朝七時、校友坪内銳雄葬式につき朝餐、青山齋場に至る。九時葬式了り、高田其他の同人と紅葉山人の墓を展す。偶々驟雨到り衣鞆皆な湿ふ。昨夜の睡眠欠乏を補はんとして午後より寝ぬ。江口惣吉の件ニ付高田之来書ニ接す。寢後和泉来り、明日徳重葬式之事を云々す。

(三十一)

三十一日

小雨。今朝七時喜久井町十〇寺(アキハ)に於て徳重之葬式を営み、坪内、高田を訪ふて登館、二三の事務を処し正午家に帰へる。午後より館務之宅調をなして夕刻に至る。書を家弟ニ与へて事を托す。高橋謙三来訪あり。坪内義衛返回礼の為来訪あり。晚間落後生、江部、小柳、小杉等交々来話。鈴木喜太郎之書ニ接す。〔三三ウ〕

九月

一日

けふは二百十日也。朝来風あり雨を交ゆ。然れども甚しきに至らず。北堂より来信あり。小林堅三、加藤万作を招き館務を処す。十時より登館、館員を召集して開館準備を始む午後二時帰宅。家弟来訪。金円調達の必要生じ、金時計を親類へ遣し金八十五円借用、内十円滯利子親類へ差入、十円弁護士謝金として〔三四オ〕家弟ニ渡す。凌暑録を筆して夜に入る。帰省中の赤塚政一上京、絹を贈らる。館用にて加藤来る。遼陽大捷の快報到る。

二日

快晴。北堂へ金三十円郵便為替にて發送、仏事の費用と旅費共也。山田愛川より小倉鎮之助之書状を転送し来る。関口泰輔来訪。参校館務を処す。大坂ニ開かるへき珍(三四ウ)書展覽会ニつき中井新三郎ニ郵書を発す。過般旅順口陥落の切迫せるを思ひ、右陥落紀念之為知友より絵はかきを集めんと欲し、絵はかきを遣し陥落の吉報到達セバ直ちに絵はかきに祝意を陳へ投郵を乞ひ置し處、爾後同方面少しく手違を生じ延引の模様見えるにつき、差当り右の絵はかきを遼陽占領の紀念となさんと欲し其旨改めて知友ニ請求す。右ニ付本日十数枚之端書(三五オ)を差出す。

三日

雨。尽日家居。凌暑録を筆す。真嶋信城の書ニ接す。

四日

雨。日曜。徳重妻来る。午後家弟来訪。晚間昆田文次郎来話。遼陽占領の公報出づ。是れ実にか古之快事、如何んぞ邦家の為めに祝セざるを(三五ウ)得んや。紀念絵は

かき巖谷小波より到る。これを先登第一となす。

五日

晴。朝来諸友より遼陽占領記念絵はがき続々来る。竹冷の句に曰く、「日いらく蜻蛉の領す野山哉」。参校館務を処す。故川田剛博士の蔵書を図書館ニ預るに付本日は朝来点検等ニ忙ハしく夕陽漸く家に還る。川田の蔵書は凡百五十箱、総二三六七部数約二千、冊数一万四五千もあらん。種類は多方面なれども史類尤も多し。すべての整理を了る迄ニ館員之過半を用えても凡そ十日間を要する見込也。晚餐後兎を伴ふて神田日本橋辺ニ祝捷の夜景を觀る。

六日

雨。参校館務を処す。川田図書、本日にて略々照合を了る。昨日に引続き記念絵はがき諸方より到る。横井(三六ウ)時冬の書ニ接す。杉山三郊に書を請へん為書画帖を為持遣す。佐久間を招き事を托す。在奥直治より絵はがきの消息ありたり。

七日

晴。地方友人より記念絵はがき続々来る。十時より参校、引続き川田図書之整理を監督し夕刻帰宅。佐々木義山来訪あり。晩間松本忠次、赤塚、佐久間等来る。(三七セ) 八日 晴。登校館務を処す。川田図書之整理未了らす、尽日忙殺さる。真嶋信城より記念絵はがき到来、俳句を載す「遼陽も御旗の風や秋の空」。同人より依頼之三句紀程標題版下、本日拙筆を試み郵送す。赤塚政作へ過般贈りものニ礼状を發す。家弟ニ書を投す。北堂より來書あり、九日五十公野浄念寺に於て御先祖并ニ先考之仏事相営み、翌十日直ニ帰京之途(三七シ)ニ上らるゝ趣也。

九日

晴。参校館務を処す。赤塚政一身上之件ニ付田原と話す。午後二時帰宅、凌暑録を筆す。佐々木義山、家弟来訪あり。高須梅溪、手紙雑誌之事ニ関し坪内逍遙の添書を持し來り接す。絵はがき八九枚を貸付す。又二三心付きたる事を説示して帰へす。石井勇より記念(三八ハ)絵

〔は〕魁
かき到来。秋草三四種購ひ園中に植ゆ。芙蓉の花殊に佳也。西条へ遣し置ける二女久、北堂と共に近日帰京ニ付富士見学校へ入学せしむるニ決し、飯田町昆田重三方へ寄留之手続を為す。富士見学校に於ては麴町区内のものにあらざれば入学を許さざる制規ある故也。

九月十日

〔三八ウ〕

けふは二百二十日の厄日なれとも昨夜の雨さえ霽れて天気清朗、風も無し。農家の歓喜知るべき也。井伊殿本来訪。和泉佳平の郵便に接す。校友三木某、田中唯の添書を齎らし来訪。参校館務を処す。帆足聴松近日越後へ赴くにつき知人へ紹介書を与ふ。四時頃より日本橋筋ニ至り物を購ふ。亦山田霜岳を訪ふて話し、松山堂ニ若干之圖書を購ふ。館ニ備付之為也。小鷹狩元〔三九オ〕凱より記念絵はかき到来す。

十一日

晴。日曜。家弟来訪あり。商品寄贈勸誘文并ニ寄贈手続等の草案を作り半日を消す。梅溪より近刊の手紙雑誌を送り来る。江部来話。北堂より五時高崎発之旨電報あ

り。四時より上野精養軒ニ於て講師招待会あり行く。百三十名許来会。九時帰宅。家人告く、〔三九ウ〕不在中佐藤伊三郎来り訪ふと。十一時過北堂、久同伴にて帰宅。昨日の記に二十廿日云々と記せしは誤にてけふか二百二十日也。併し平穩ハ昨日と異なるなし。

十二日

曇。早朝佐藤伊三郎来訪あり。参校館務を処す。帰宅後兒ニ課す。

十三日

〔四〇オ〕

雨晴る。桑田春風の書ニ接す。手紙雑誌之事ニ関して也。北堂より西条丹呉旧隠宅（一行の久しく居りし庵の事）へ移りたし云々の談あり、お心まかせになさるべしと申上、北堂大いに満足あらせられたり。右隠宅は目下丹呉家にて修繕中之趣、北堂これに移らるゝ上は、久しく水原佐藤家ニ托し置ける家什一切をこれに移し北堂の用に供する筈也。参校館務を処し、尽日多忙を〔四〇ウ〕極む。景山鍋吉之書ニ接す。松本忠治、真嶋叔母より来信あり。

十四日

晴。横井時冬来話。參校館務を処す。尽日館務ニ忙殺せらる。長田秋濤と話す。不日伊藤侯の書貰受けの為秋濤を訪問の約也。真嶋信城より、紀行標題更らに行体に書すべき旨申来る。児ニ課す。」(四一オ)

十五日

曇。真嶋信城へ書を投す。(三句紀程、行体に書き、其の需ニ応す)。高須梅溪来訪。手紙雜誌之材料一二を貸付し、又角田竹冷ニ介す。青木篤恒より在清從軍者の心得と題する小冊子を送り来る。これは此程征露軍に贈りたるものよし、支那に在りて身を処する必要なこと共簡単に列挙したるものにて、斯る書を編して征露軍に贈り(四一ウ)たるは至極適當之思付也。參校館務を処す。浪華芳三より来書あり。国井守蔵息、学業之件ニ付出来、来訪あり。晩間落後生来訪、史談ニ時を移して去る。

十六日

夜来の雨未だ収まらず午後に至り益々甚し。国井守蔵来

訪。千葉鉦蔵、飯邨修治の書ニ接す。參校館務を処す。退館後松平康国を(四二ウ)訪ふて在清中之事を聞く。

(泰山に登りたる話、曲阜に於ける孔子の廟を訪問せる話、尤も傾聴之価ありき)。目下郷里に在る建部遯吾より紀念絵はがきの消息あり。真嶋信城より又三句紀程之標題ニ付云々し来る。杉山三郊ニ揮毫を托したる書画帖出来ニ付送り来る。今夜より北堂につき吾家の古事を聞き、聊か書き記し置かんと思ひ立ち、先つ曾祖父の君の事より聞(四二ウ)き始めたり。

十七日

昨夜来暴風雨あり今朝来漸々甚し。北堂の談話を書きつけんため冊子を調べ、題して北堂夜話と云ふ。梅溪ニ書を与ふ。凌暑録を筆す。參校館務を処す。真嶋信城より又三句紀程之標題書き改むべき旨申来りたるに付、惡筆を試遣す。中井新三郎大坂より帰京。南水漫遊(四三オ)三教色外珍本二三書を齎らし来り見す。暫時借覧せんと手元ニ留む。家弟来訪。坪内銳雄五十日祭のむしもの来る。

十八日

日曜。終日風あり。国井守蔵来訪、踵て昆田重三来訪、一身上の事を云々して去る。北堂夜話、春城漫興等の雑筆をものし「三教色」を読むて半日を消す。夕刻肥田野「(四三ウ)畏三郎来訪、相携えて上野梅川ニ抵り晚餐を与にして別る。半古、虚心、漣、玉堂(川合)、信綱(佐々木)等発起人となり月令会と云ふを組織し、来廿六日江東梅園ニ第一回を開き、観月を為さんとする旨之案内来る。夜来雨あり。

十九日

雨。八月十一日付豊山の絵はかき消息あり。久保田清治来訪、身上之事を云々す。「(四四オ)肥田野ニ書を与ふ。参校館務を処す。学報へ掲ぐべき原稿を作り了る。梅溪来訪ニ付手紙雑誌の材料を与ふ。千葉ニ書を投す。郡司大慰遭難之風説あるニ付露伴同好談話会ニ出席之有無問合之為也。今日戦局之未来ニ付極めて悲観的事情を聞き、呆然自失す。児ニ課す。直治八月十五日付絵はかき消息あり。又池田龍一よりも絵はかき到来す。夜来北堂

に就て家の昔し譚を聴き、「(四四ウ)北堂夜話に書きつく。十一時頃より三女病む。前田香村ニ診を請ふ。曰く、急性腸加多兒なりと。応急の手当を加えて寝ぬ。

念日

雨。三女病漸く可也。直治より二通の絵はかき通信あり、共ニアルサス、ローレンより発する所のもの。三女其後容体よろしからず再度前田香村の来診を乞ふ。本日登「(四五オ)館せず。午後肥田野畏三郎来訪あり。夜に入り北堂に就て家の昔し譚を聞き、之れを書きつく。終夜児、腸部に疼痛を感じ、家人看護ニつとむ。十二時過大雨あり。

念一日

雨。今朝三女を伴ふて宮本の診察を乞ふ。午後より参校館務を処す。家弟へ公正証書入書状を発す。昆田重三の書ニ接す。帰宅後北堂夜「(四五ウ)話を筆して夜に入る。

念二日

晴。館之図書を購入するため、全日、日本橋、神田辺の書肆をあざり数十部之雑書を獲たり。山一を訪ふて話す。不

在中日清協会の村上芳太郎来訪。千葉鉞藏の書ニ接す。坂口五峰ニ書を与ふ。兒病愈ゆ。月令会へ晴天なれば出席之旨答ふ。軍事公債月額「四六〇」第百銀行へ納入。

念三日

曇天、涼氣を覚ふ。秋季皇靈祭ニ付休業。井伊巖本、肥田野畏三郎、山岸岩根交々来訪。北堂夜話、春城漫興を筆し半日を消す。東京美術学校より来書あり、真嶋中太郎の事ニ関す。

念四日

曇。早朝下谷池之端琳琅閣に館用之圖書を検し、若干を購ふ。真嶋中太郎件ニ付美術学校に出頭。田中稻城を帝國図書館に訪ふて話す。参校館務を処す。山田霜岳、高須梅溪の書ニ接す。山田ニ答ふ。千葉ニ書を投ず。不在中、中井新三郎来訪。真嶋桂次郎ニ書を投ず。中井再来、黄表紙四百種弘ものある趣を報じ云々して去る。今夜旧曆八月十五夜也。旧例ニ「四七〇」依り酒と野菜を供へて月を迎ふ。偶々降雨あり無月。佐久間、赤塚等来る。小倉鎮之助横浜支店（安田銀行）へ転動の為出京之

趣報し来る。

念五日

雨。日曜。朝来山一紹介の松井某、昆田文次郎（弟身上の件ニ関し）、増子（中学付属敷地借入之件）、関口泰輔等交々来訪あり正午に至り皆散す。「四七〇」千葉鉞藏、小倉鎮之助ニ書を投ず。午後より春城漫興を筆し悶を遣る。新野亮太郎来訪。建部遜吾父死去につき吊状を送る。

念六日

曇天、冷氣甚し。校友井伊巖本、林瑛身上の事ニつき来訪。山田英太郎、坪谷善四郎ニ添書を与ふ。山一の書ニ接す。参校館務を処す。昆田重三并ニ宮下兼吉の事ニ関し高田と話す。「四八〇」昆田ニ書を与ふ。吉田東伍より石版摺符谷校斎之書牘を送り来る。久保田清治来訪あり。金五円也、小為替にて東京美術学校へ郵送す。真嶋中太郎、九月より十一月分月謝也。兒ニ課す。晩間落後生来話。寢後昆田重三来訪あり。千葉鉞藏の書ニ接す。

念七日

晴。今朝より袷を着す。参校館務を処し正午に至る。午後より中西屋「四八九」外二三の書店＝出張し、館之図書を購入。昆田を訪ふて同人弟之事を話す。又宮下兼吉を招き、同人を学校会計部へ入るゝことにつき協議し、夕刻家に帰へる。春城漫興を筆す。

念八日

晴。風。五十嵐博厚（在文科大学生、北蒲原郡人）来り見る。松山堂来る。小倉鎮、肥田野、真嶋信城等の来書「四九〇」＝接す。林英を山沢方へ紹介す。村上專精、例の学校設置の件＝付来月二日相談会を催す云々＝付来談あり。参校館務を処す。小泉八雲の計に接す。晩間梶田半古来訪、自作の盆を贈らる。金曜会の通知書を領す。

廿九日

晴。小倉鎮之助＝簡して金曜会入会を勧む。参校館務を処す。高須「四九ウ」梅溪の書＝接す。午後より琳琅閣＝雑書を検し三十余部購求、図書館用也。真嶋信城の書＝接す。久保田清治を学校会計へ備入るゝことに決し、明

日出校すべき旨申遣す。千葉鉦藏より来書あり。

三十日

晴。参校館務を処す。真嶋信城＝三十円為替入書状を發す。前月借入金五十円之内返済分也。久保田清「五〇ウ」治来訪。千葉鉦藏＝書を投す。五時より銀行集会所＝金曜会を開く。遼陽より近々帰へりたる坪谷善四郎の観戦談、米国より帰朝の織田一の博覧会談あり。十時漸く散会。十二時家に帰へる。「五〇ウ」

十月

一日

快晴。久保田清治来訪。小倉鎮之助、真嶋桂次郎之書＝接す。午前九時より内子、小兒と共に北堂を奉して目黒不動＝参詣し、角伊勢＝飯し、それより腕車にて芝泉岳寺＝抵り義士の墓を訪ひ、青松寺＝詣し、電車にて薄暮家＝帰へる。不在中家弟并＝田原来訪あり。「五一ウ」

十月二日 日曜 曇天

午前中在宅、春城漫興を筆す。午後より日本橋辺＝物を

購ひ、山田霜岳を訪ふて話し、一ツ橋通学士会倶楽部内ニ村上專精発起の女子学校創立相談会あり出席す。協議の末時局ニ拘らず適當之建物を得バ先づ開校すべしと決して散す。石塚三郎より自写の写真三枚を贈り来る。」

(五一ウ)

三日

曇天。参校館務を処す。内山諦観來訪、越佐会之事を云々して去る。本今朝來気分優れず。

四日

曇天。朝來琳琅閣に雜書を檢し百余冊を購ふ。同好談話會之件ニ付千葉掬香を訪ふ。偶々本田種竹來會、午餐の饗を受け談笑刻を移して別る。肥田野畏三郎來」(五二ウ)訪、日の丸水巻打を贈らる。(此の飲料ハ岩代国より出る飯泉にて平野水ニ似たるもの也)。千葉より兩度の書狀今朝到着之趣ニて図書館より転送し来る。松本忠次齒科修業之為出京、物を贈らる。林暎の書ニ接す。

五日

雨。風邪之気味あり。昆田重三より松茸を贈り来る。参

校館務を」(五二ウ) 処す。杉山令吉より明治初年の朝鮮事

件外交秘密文書一綴借覽、これは旧と外務少丞たりし森

山茂所蔵なり。必要之者だけ謄写ニ付し館蔵となさんと

欲す。松本忠次の事ニつき本田信教ニ書を投す。山一の

書ニ接す。直ニ答ふ。児ニ課す。晚間池之端ニ眼鏡を

購ふ。夜分細書を読む能ハ」(五三ウ) さるか故也。嗚呼余

も亦老たり。琳琅閣ニ立寄りて帰宅。

六日

雨霽。琳琅閣より万水一露六十余冊持参。水原佐藤家へ満寿市を経て預け置たる荷物十三点、今度北堂西条ニト居のため入用ニ付取出すことに關し書狀を米太郎ニ差出す。石塚三郎、肥田野畏三郎ニ書を投す。関口泰輔來ル。謄写を要する書類若干」(五三ウ) を交付す。参校館務を処す。中井新三郎と話す。帰宅後児ニ課す。雑筆之冊子新調、題して寸陰換壁録と云ふ。

七日

晴。今朝昆田を訪ふ。偶々上野喜永次在り、千葉之新聞を辞し遠からず東北漫遊を為す由を聞く。又直治母の計

を聞く。佐藤伊三郎并ニ蘂科を新潟銀行支店に訪ふて肥田野より依頼之件等」(五四オ)を話す。琳琅閣ニ若干之書を購入。太平御覧外数十部也。皆な館之為めに購ひたる也。余も亦金石摺り物張り交セ三帖を購入。中ニ就き積塵成山帖と題する一帖(新井文庫の印あり)最も稀有のものを取め頗る珍とすべし。午時、浅草金田ニ飯し、浅倉屋ニ二三の書籍を購入して帰宅。児ニ課す。晚間坂本嘉治馬来訪、富山房増資之事を云々して去る。換壁録を筆す。」(五四ウ)

八日

晴。池久吉来訪。大隈伯養鶏之事ニ付云々して去る。江部来訪。真嶋信城ニ書を投し過般問合之大学生之事を云々す。参校館務を処す。瑞西旅行中之直治より八月三十一日付絵はかき并ニ波多野精一より八月廿七日付絵はかき(独乙安着之報)到来。佐藤勝三郎来訪、山沢ニ紹介状を与ふ。佐藤伊左衛門ニ郵書を発す。先年預けたる」(五五オ)荷物を不日引出す事に就て也。本田信教来訪。田辺久藏之書ニ接す。

九日

曇後雨。九月二日付直治の絵端書消息到る。横井時冬より清国産「芸」一鉢を贈らる。これは清国にては文庫ニ置くものよし、虫を防ぐ為めか。三枝守齋を訪ふて大隈伯養鶏云々の事を話す。参校館務を処す。午後二時より第三回図書館談話会を」(五五ウ)開く。幸田露伴(釣漁文学)、幸堂得知(演劇音楽史)出席、一場の講演あり。散会后右両人并ニ坪内、千葉と共に明進軒ニ晚餐を与にし、九時相別る。坂口五峰、肥田野畏三郎来話。不在中田辺久藏来訪。一両日中北堂越後へ御帰着ニつき、丹呉翁宛書翰認め北堂ニ依托す。林瑛、佐藤勝三郎の書ニ接す。北堂不日帰国に付知人之来り訪ふ者朝来相踵く。」(五六オ)

十日

夜来の雨未霽す。田辺久藏来訪、羽越製塩会社之為勸業銀行より資金借受度云々の談あり。同銀行五十嵐、潮田ニ問合、返答を為す筈にて別る。午前家居、換壁録を筆す。午後より参校館務を処す。松平康国、幸田露伴ニ書

名著大作

図書館蔵「名著大作」扁額

を投す。在独乙嶋村滝太郎より
絵はかき消息あり。午後より雨
風益々甚し。夜に入り児ニ課
す。高須芳次「(五六ウ)郎の書ニ
接す。

十一日

好晴を得たり。参校館務を処
す。越佐会幹事伊藤貞次、佐藤
長蔵、内山諦観来訪、会務を協
議して去る。高須梅溪に簡す。

(小野、成嶋の書翰二通、石版
摺狩谷掖斎之書簡を貸付す)。

長田秋涛より伊藤侯之書并ニ候

か秋涛に贈りし其昌之法帖(冊
を贈らる。余より大瓢一、茶一

(五七ウ)器一を贈り謝を為す。松

平康国より泰山之刻字中「名著
大作」の四字を選び贈り来る。

これは装潢の上図書館の扁額となさん積也。午後、田辺
依頼之件ニ付勸業銀行に五十嵐敬止を訪問す。偶々嶋田
孝之ニ会す。帰途田辺を樋口屋ニ訪ふ。不在に付帰宅後
書状を発す。

十二日

晴。今朝六時発汽車にて北堂御帰国「(五七ウ)ニつき内子
同伴大宮迄同車奉送、万松楼ニ朝餐をしたため、林間を
徘徊して一二時間を費し、十時過之汽車にて帰京、浅草
辺ニ徜徉し浅倉に立寄圖書を見、向嶋百華園ニ秋艸を觀
て三時過帰宅。長田秋涛、山岸荷葉等之書ニ接す。又不
在中古田鎮三来訪。田辺久蔵来話。今夜二水会あり、疲
勞の為出席せず。」(五八ウ)

十三日

雨。早朝より参校館務を処す。中井新三郎来訪あり、絵
表紙張こみ帳、億說年代記(中井自写)を贈らる。赤塚
政作の書ニ接す。遼陽、奉天の間に大会戦あり吾軍大捷
を得、追撃中との快報到る。

十四日

雨霽。昨夜六時、北堂安着之電報西條より来る。真嶋信城より農商(五八ウ)、務商工局詰技師伊東万太郎之為人、其他身元取調呉るゝ様依頼書来る。中邨進午の書に接す。今日より四日間学校秋季水上運動会ニ付閉館休業す。来ル二十日高田宅に学校紀念会(マ・念)と慰勞会を兼開會之案内来る。井伊駈本、佐藤勝三郎、関口泰輔来訪。佐藤を上嶋長久ニ介す。山田清作、坪内の使として来り新曲浦嶋標題のことにつき云々す。参校館務を処す。午後より金石類の反故(五九オ)をしらべ出し「アルバム」に張付け半日を消す。佐藤勝再訪。

十五日

晴。池之端琳琅閣ニ古書をあさり若干の写本を得、直ちに携へ歸りて終日之を検す。午後高橋謙三、室十一郎来訪。室を小野寺久哉ニ介す。来ル二十日高橋同伴、大隈伯訪問を約す。千葉掬香の書ニ接す。晩間和泉文三、江部淳夫来話。(五九ウ)

十六日

晴。幸堂得知(鈴木利兵衛)、中井新三郎ニ郵書を發

す。松本忠次の書ニ接す。家弟、吉田東伍等来訪あり。午後より旗野八重、健三郎来訪。越後味噌、「ひしほ」など贈らる。けふは学校の水上競技会(墨江に於て)、当日なれども行かず。琳琅閣に古筆帖を購ふ。価十円也。吾軍追撃の效果頗る旨しく敵の死傷□萬に垂(六〇オ)んとすとの報あり。内藤久寛之来書ニ接す。夜分中井浩水来訪。

十七日

夜来雨あり今朝未霽れす。赤塚政作ニ郵書を發す。学报ニ掲載すべき図書館記事の原稿を作る。松平破天荒を訪ふ、不遇。上野喜永次来訪。朝鮮行ニ付云々の談あり、柏原文太郎に介す。佐久間鉄雄来訪。五十嵐博厚之事を云々す。(六〇ウ)

十八日

尽日雨。北堂より来信あり。九時より参校館務を処す。帰宅後坪内逍遙来話。金石類の反故を調べ出し鶏肋の情あるものを「アルバム」に張り込夕刻に至る。

十九日

雨霽。池久吉の書ニ接す。直ニ答ふ。勝又松四郎の郵便ニ接す。同人は目(六一オ)下第八師団第八補助輪卒隊付にて出征中なり。此書状は蓋し遼陽より発せしなり。井伊敷本來訪ニ付写字を托す。波多野豊吉来訪、依頼之儀ニ付五十嵐敬止ニ書状を与ふ。松平康国を訪ふ。泰山磨崖の碑文中「徳義」の二大字并ニ法書一帖(乾隆年間衛克均肉筆、杜少陵の詩を書したるもの)を贈らる。高田を訪ふ、不在。更らに幸田露伴を向嶋の居に訪ひ、過日学校へ図書を贈られたるニ付謝を為す。一(六一ウ)時過帰宅。秋月種樹卒す。児ニ課す。換壁録を筆し夜に入る。波多野豊吉再訪あり。

念日

雨霽、曇天。学校之紀念日ニ付休業なれとも参館々務を見、午後一時より高田宅ニ於て例年之通り紀念会を兼ね職員慰勞の園游会あり。不在中坂口五峰出京来訪のよし。佐藤勝三郎の書ニ接す。(六一オ)

念一日

晴。参校館務を処す。高橋謙三来館ニ付同伴、大隈伯を

訪ふ。伯は例之ごとく純論横議、数時間の大氣談を吐き、転た聴者をして感動せしめたり。談話中五峰も来り会せしか十一時半頃辞して五峰と共に明進軒ニ午餐を与にし、相別れて上島長久、昆田、増田等を歴訪して家に帰へる。在米真嶋中太郎の書ニ接す。五十嵐敬止、池久吉之書ニ接す。不在中橋本定静、執達吏(六一ウ)を伴ふて来りたるよし、例により例のことく要領を得ず引取りたるよし。池久吉、波多野豊吉之書ニ接す。

念二日

曇天。今朝物集高見を千駄木林町に訪ふ。図書保存のことにつき数時間談話あり、結局来月図書館談話会に出席を諾す。帰路田中稻城を帝国図書館ニ訪ひ、過般学校にて購ひたる図書代を交付して別る。午後参校館務(六一オ)を処す。平田重平来訪あり。同人は予備少尉として旅順攻撃軍に加はり居りしか負傷のため帰国せし也。戦況を聞くこと一時間余にして別る。青柳篤恒の書ニ接す。夕刻より冷氣甚し。不在中家弟来訪あり。換壁録を筆し夜に入る。

念三日

晴。日曜。午前中家居。午後より参校館務を処す。又大講堂ニ開設せる早(六三ウ) 稲田清韓協会ニ臨む。神鞭知常、大隈伯之演説あり、諸同人多く来り会す。四時半会を閉づ。物集高見より来書あり、図書保存之趣旨并ニ法を反覆して大隈伯ニ執達を依頼し来る。佐藤勝三郎ニ書を與ふ。換壁録を筆して寝に就く。

念四日

陰、冷氣甚し。午前八時より登館々務を処す。午後三時より図書館商議員会を(六四オ) 本校応接室ニ開く。二十一二名参会あり。余より諸般之館務を報告し、本年度購入之図書并ニ購入方針等を評決し、晚餐を与にして八時頃散会す。帰宅後燈下換壁録を筆し、九時寝ニ就く。九月十八日ボスニヤ府旅行先より発送せる直治の絵端書到達す。

念五日

快晴。北堂より来信に曰く、去る廿日水原佐藤より諸荷物目録之通請取済、何(六四ウ) れ細かに品を改め目録を

送る云々。朝食後羽田智証、増田義一を訪ふ、不在。日本橋筋ニ二三の用を弁す。それより琳琅閣に立寄り道証寺の鐘銘を獲。道証寺は山城深草に在り。然れとも此の鐘、其後徒て大和宇智郡栄山寺に在りと云ふ。書ハ小野公端の楷也。古雅喜ぶべし。佐藤勝三郎、神戸より発したる書状到達す。

念六日

好晴。佐藤勝三郎ニ在大坂砂川、中橋徳五郎、村山龍平宛添書を与ふ。参校館務を処す。在ボスニヤ府直治に郵書を与ふ。児ニ課す。

念七日

晴。在米ニウハンプンシャイア州ヒリップス、エリセタ、アカデミー真嶋中太郎ニ郵書を発す。和田万吉ニ書を投して事を問ふ。参校館務を処す。午後より千葉鉦蔵を訪ふ。同人之冀望により所蔵の古銅劍(六五ウ)を譲与す。帰路琳琅閣ニ立寄り古碑本を購ふて還へる。一は北魏李襄の碑、一ハ魏渤海太守王偃の碑、共に一千三百年前のもの、書体は両から楷、古雅掬すべし。羽田智証之

答書ニ接す。

念八日

快晴。松山堂来る。参校館務を処し、九時頃より帝国大
学構内に開催の史料展覧会に至り観る。午後関口泰輔来
訪あり。佐藤勝三郎之郵便ニ接す。学校田(六六六)中よ
り来書あり。明日大隈伯、甲州甲府に開催の校友会に臨
席につき余にも同行すべし云々(明朝七時二十分牛込停
車場発、三十一日帰京之予定也)。直ちに承諾の旨を答
ふ。千葉掬香へ人を遣し杏所印譜を贈る。又書画帖の執
筆を一二詩家ニ托す。晚間其答書を得たり。換璧録を筆
し夜に入る。和田万吉の書ニ接す。

念九日

少雨あり。長田秋涛、千葉掬香ニ書を(六六六)与ふ。今
朝七時三十分発、牛込発汽車にて大隈伯夫婦に陪従、甲
州行の途に上る。同行高田、天野、浮田、田中也。甲州
迄は曾て岡山悟堂と明治十二年頃徒歩旅行をなせしこ
とあれども鉄道敷設されて後は初めての旅行也。甲府迄
六時間にて達す。往日の不便に比すれば実に天壤量なら

ざる差ある也。小仏、笹子を申通するに四十余の墜道(マヤ・路)あ

り。尤も長き墜道(マヤ)を通過するに十分を要す。車中、伯の

談論例(六七〇)のこたく面白ろく眼界に入るの風景も亦

佳也。猿橋に於て午晡、午後二時頃甲府に着す。甲府付

近の駅より伯を出で迎ふるもの多く車中応接に違あらさ

る程なりき。甲府着の上、伯は豪商若尾逸平の家ニ泊

し、余等は佐渡幸に投す。今夜望仙閣に実業家の招待会

あり、県下各種の人々二百五六十名来会、伯の演説あ

り。頗る盛会なりき。此地進歩党与味の党派勢微弱也。

而かも(六七〇)往年伊藤侯来遊當時の招待会に比すれば

幾倍の盛況を呈したりと發起人は云ひ居れり。見神(六七〇)

三十日

好晴。甲州の人御嶽の勝を説くこと盛ん也。伯一行を案

内し一日の歎を尽さんと欲す。伯并ニ一行之れを諾す。

即ち今朝七時発す。一行并ニ案内者、校友等の随伴する

もの三十人、和田嶺麓迄人車、それより山路籃輿を獻ふ

て(六七〇)行く。山中老松鬱々血に染めたる蔓蘿は樹幹

を飾り、近く樹間より富嶽を望む景色甚佳也。天神平と

云ふに憩ふ。これより以北は御嶽新道也。更らに行くこと里余にして能泉と云ふ処に達す。こゝには近年建てたる小学校あり、蓋し山中の一軒屋也。これより一帯の溪流あり荒川と云ふ此川の沿岸二里の間、奇巖快石或は低く、或は高く、或は聳て天を摩し、或は伏して水(六八九)流を圧す。奇景百出、蓋し邪馬、妙義以上の勝区也。愈々進めは景は愈々奇に、石門を経て昇仙橋を渡り、仰て覚円峰を望み、伏して仙娥滝を見るの辺は景色の「クラマックス」にして奇絶怪絶名状すべからず誠に天地の美観也。帰途能泉小学校に午哺し、午後五時甲府に帰へる。今夜松亭に校友会を開く。県知事并ニ豪富三十名亦席に列す。伯の演説あり。十時散会を報す。」

三十一日

快晴。昨日より寒気大いに加へる。今朝一行帰京ニ決し、八時旅宿を出て、風間製糸場を見、九時二十分の汽車に投ず。午後四時午込着、直ちに家に帰へる。今夜甲府より伯を送る為め出京せる林(闔)、小林、百瀬等と

共に伯に招かれて晚餐の饗を受く。在西条、北堂の書ニ接す。家人告く、不在中小倉鎮之助来ると。」(六九ウ)

十一月

十一日

晴。五十嵐博厚の書ニ接す。参校館務を処す。始めて巽来次郎と会し、関口泰輔の事につき話す。午後より寸陰換壁録を筆す。今夜桑木巖翼之為めに同人富士見軒ニ送別会を張る。余所勞の為行かず。桑木は召集に依り不日戦地に赴かんとする也。哲学界に有数の斯人をして軍旅に従事せしむ、兵制の然ら(七〇オ)しむる所已むを得ずと虽とも、學術の為め痛く惜ますんばあらざる也。夕刻関口泰輔来訪あり。

十二日

晴。千葉掬香、山田霜岳より来書あり。朝来換壁録に甲州紀行を筆し十時に至り参校事を処す。村上專精、巽来次郎と話す。月額之内より五十円領掌。」(七〇ウ)

三日 天長節

好晴。昆田重三來訪、物を贈らる。母上より來書あり。北堂の還曆を賀する為濁川真嶋より種々の物を贈られたる旨報じ来る。木綿縞沓反小包にて到達。水原へ預け置きたる品の明細書も到來す。児を拉して上野、浅草に散策し、琳琅閣に李斯嶧山碑二幅、禹响嘯の碑一幅を購ふ。価五円也。真嶋信城の郵書ニ接す。踵て三句紀程若干部并ニ写真沓葉到達す。三句紀程、(七一)信城西上の紀行也。余曩きに信城の囑ニ応し標題を書す。即ち此紀行是也。紀行半は余の訪問記也。

四日

好晴。在西条の北堂ニ書状を呈す。真嶋露村に書を与えて味噌漬を贈られたる札を述べ。又真嶋叔母にも札状を發す。参校館務を処す。巽來次郎より清国秘電の写一冊を借覽す。千葉掬香、水谷不倒ニ書を投ず。今朝來腹痛を覚え(七一)三回利す。高等子科事務幹事入営に付、今夜吉熊に於て送別会あり、余も臨席す。今夜真嶋信城へ移の品を小包にて發送す。

五日

好晴。掬香の書ニ接す。甲州紀行を筆し半日を消す。参校館務を処す。明日より図書館日曜公開を行ふに付本日それ／＼準備を為す。甲府の長田英より柿を贈り来る。富山(七三)房主人ニ書を与へ事を托す。舞之本を読み十時に至る。

六日

朝雨あり、後風起る。冷氣大に加へるを覚ふ。日曜なれとも参校す。本月初めて公開講義を開く。坪井正五郎、坪内雄藏之講演あり。又図書館ニ於ても本日より日曜公開を始む。村山龍之助より薩摩芋沓俵送り来る。午後家居、換壁録を筆す。家弟來訪あり。(七三)

七日

快晴。参校館務を処す。又早稲田中学評議員会に出席す。同校追々隆盛ニ付教場百二十坪四室、小使部屋等増築并ニ借入敷地埋立之件を評決す。これ等の為めに要する経費凡そ七千円、内二千円積立金にて仕払、余五千元は森村銀行より借入、來年一ヶ年にて通常収入より返金之都合也。杉山令吉の書ニ接す。坪内逍遙の新著、新

樂「七三才」劇論を出版部より送り来る。又富山房より名著文庫二十冊を送り来る。換璧録を筆し夜に入る。

八日

快晴。参校館務を処す。学校出版部より坪内逍遙の新著、浦嶋外二三の近刊書を贈り来る。浦嶋を読み夜に入る。桑田正の書ニ接す。直ニ答ふ。春畝山人の書幅、裝潢出来す。」(七三才)

九日

晴。参校館務を処す。山梨県之藏書家渡辺信、大隈伯を訪ひ来りたるニ付余も伯に招かれて同席す。物集高見、千葉掬香ニ書を与ふ。真嶋信城より味噌漬老樽を贈り来る。真嶋へ礼状を発す。晩間桑田春風来訪、手紙雑誌の事を云々す。二三の材料を与へて還へす。昆田重三より山鳥一羽贈らる。明後日二水会之通知来る。」(七四才)

十日

快晴。参校館務を処す。千葉掬香の書并ニ目下旅行中之霜岳、函嶺塔沢より発したる書状到達、異来次郎を和田万吉ニ介す。今夜上京中なる上遠野富之助を紅葉館ニ招

き商品見本蒐集之事ニ付依頼を為す。高田、田原同席也。佐藤勝三郎、小柳大和等の書ニ接す。石塚三郎より自撮の風景写真数枚を送り来る。本日帝国博物館「(七四才)」を訪ひ目下出陳の紀泰山の碑を観る。これ玄宗皇帝泰山に幸セし時建し処の者、長サ二丈三四尺、横一丈八九尺の大幅也。琳琅閣に古写経、伊藤圭介画梅之幅、椿年の画稿等を購ふ。梅之幅と椿年の画は半峰の冀望により直ニ譲与す。

十一日

晴。参校館務を処す。物集高見之答書ニ接す。校友植松孝照より入「(七五才)」營を報し来る。赤堀又次郎と古写経之談を為す。午後より散策、琳琅閣ニ古文書数点を購ふ。一二面白ろきものあり。帰宅後アルバムに之を張りつけなどして夜に入る。晩間落後生来話。今夜偕楽園ニ二水会あり、風邪之為欠席す。富山房主坂本より鴻池銀行借入金壹万円之保証を求め来る。仍て諾して委任状を与ふ。」(七五才)

十二日

晴。参校館務を処す。甲斐國書目録之問答付ふ。本日

添書を与ふ。井伊覈本不日宇都宮へ赴くにつき来て別を告ぐ。参校館務を処す。在英島村滝太郎へ郵書を発す。午後より琳琅閣ニ至り過日購入之古文書面白からざるにつき返付し更らに乾坤正義集二百冊を購ふ。価四十五円也。館用也。宮崎璋蔵(三昧)の答書ニ接す。真嶋中太郎之学費五円美術学校へ納付、早稻田中学社員会決議録廻附につき調印之上返す。」(七八〇)

十八日 晴。岩下清周之返書ニ接す。参校館務を処す。名古屋商業会議所の木邨竹次郎ニ商品見本蒐集依頼之書を発す。越佐会幹事と同会之事を処す。千葉掬香之書ニ接す。今夜金曜会を銀行集会所ニ開く。参謀本部より堀内中佐、斎藤常三郎(第一軍司令部付中尉)出席、軍事上の談話を為す。斎藤中尉は遼陽攻撃苦戦談をなし大いに会衆の感動」(七九〇)を諾起セリ。十一時過家ニ還る。手紙雑誌社の為めに昆田より古河市兵衛の手簡三通を借受く。

十九日

晴。桑田春風ニ手紙雑誌の材料を与ふ。長田秋涛来話。参校館務を処す。在外埴原正直、副嶋義一ニ書を投す。商品見本之件ニ付京都之藤原忠一郎ニ書を投す。真嶋信城并ニ北堂より来書あり。」(七九〇)

廿一日 晴。参校館務を処す。渡辺信の書ニ接す。物集、本田、山田(三良)ニ書状を發す。」(八〇〇)真嶋より中太郎学費(余立替分)到来す。昨日清松子(在鎌倉)之病氣を見舞ハしむるため児機を遣す。井伊覈本、千葉鋏、桑田春風等より来書あり。

廿二日 快晴。千葉、小野寺文哉ニ端書を投す。参校館務を処す。福井の三田邨甚三郎ニ書を投じて商品見本蒐集之事

を依頼す。午後より児を拉して上野辺ニ散策す。晚間千葉、小野寺の答書到る。「ハ〇〇」

廿三日

夜来雨あり、朝ニ至って罷む。今日大祭ニつき館務休業。坂口五峰着京之報ニ接す。本箱三個持たせ館僕を千葉方へ遣す。十月五日サラエボ発の直治の絵端書通信到達す。内人と二女を携え浅草之西の市を觀、帰途琳琅閣ニ池五山并ニ磐溪書、深川竹枝之横軸を購ふ。晚間横井時冬より糸乱記并ニ糸割符由緒書(写本三冊)を「ハ一〇」為持遣さる。これは堺貿易の旧記にて原本は焼失して今は界にも存せざるもの由、貿易史の材料としては屈竟の者也。一本を謄写して館に備えんと欲す。喜代四来訪。

廿四日

快晴。琳琅閣并ニ本田種竹(幸之助)より来書あり。寸陰換壁録を筆す。参校館務を処す。藤原忠太郎、千葉鉦の答書ニ接す。国井謙蔵、品行上之「ハ二〇」事ニ付京華中学へ人を遣す。越佐会幹事と会務を処す。

廿五日

晴。新保勘解人(葛塚在のもの、本年得業生)を織田一、石渡数一ニ紹介す。参校館務を処す。国井謙蔵来訪。同人品行上之事ニ付国元へ書状を發す。藤原忠一郎ニ書を与ふ。坂口五峰来訪、相共に明進軒ニ午餐して別る。午後より家居。橋本定静件ニ付「ハ二三」執達吏來る。余の有する債権に關し云々して去る。余の執達吏と応接するハこれで二度目也。案外面白ろきもの也。商品見本之件ニ付京都栗田口錦光山宗兵衛ニ書状を發す。赤塚政一ニ藤田四郎宛添書を付す。千葉鉦の書ニ接す。

廿六日

雨。千葉鉦ニ答ふ。参校館務を処す。午後より琳琅閣ニ五山版の凶書一、朝「ハ二四」鮮版の古書一を購ふ。共ニ三浦梧楼旧蔵にて珍本也。二時、東京美術学校内に開會之文庫協會ニ出席す。来春第二回珍書展覽會開會之事を決す。五時より富士見楼ニ於て越佐会を開く。来會者四十名、坪谷の觀戰談等あり。廿八日学校社員會之通牒ニ

校館務を見る。不用書籍若干万屋ニ売却す。午後より佐藤伊左衛門を築地之有明館ニ訪ふて話す。帰途昆田を古河事務所ニ訪ふ。偶々羽田智証と会し、斎藤へ出訴之事件ニ付協議し夕刻家ニ還へる。

二日

雨。佐藤伊左衛門より来る四日招待状来る。松山堂来訪、若干之図書を購入。参校館務を処す。景山鍋吉の書ニ接す。又山田一郎、箱根より差出したる書状到達。谷資敬へ書を投じて新発田銀行之件を云々す。柏原文太郎を訪ふ、不遇。高沢喜一郎来訪。大坂の小川為、岩下清周へ校用の書状を發す。晩間家弟来り長女再縁之事を云々して去る。今夜高沢と共に明進軒ニ晚餐を与にして」(八六オ) 別る。

三日

晴。江部淳夫同伴、柏原文太郎を訪ふて話す。参考執務中、青山、高沢来訪ニ付大隈伯庭園を案内す。在外小山温ニ館用之書信を發す。在新潟帆足聴松の書ニ接す。新野亮太郎母より漬物を贈る旨之書状来る。国井謙藏宿舍

之事ニ関し和泉を京華中学へ遣る。国井守蔵ニ郵書を發」(八六ウ) す。

四日

払曉、みつ瘰癧をひき起し内子と共に看護、七時に至り漸く収まる。高橋謙三来訪。国井守蔵、井伊巖本の書ニ接す。午後より松山堂ニ古版春画を觀る。三時より佐藤伊左衛門に招かれ花月楼ニ至る。新潟県ニ縁故ある在京者四十名参会す。不在中佐藤伊助来訪、物を贈らる。文三も亦」(八七オ) 来訪のよし。七日、二水会之通知来る。

五日

晴。参校館務を処す。不用図書携帶、松山堂を訪ふて宋版杜工部集、明版淳化帖等を見る。午後より在宅。多少之頭痛を感す。入浴早々寝ぬ。奉公会(名誉員となりたる謝状)、心性学館(談話会通知)等の書ニ接す。国井方より電信為替十五円到達。」(八七ウ)

六日

晴。松山堂来訪。美津容体思へしからず宮本へ遣して診察を乞ふ。腸胃よろしからずと申す事也。参校館務を処

す。和泉を京華中学へ遣し国井の事を処せしむ。国井守蔵ニ其の仕末を郵報す。千葉鈺の書ニ接す、直ニ答ふ。江部の書ニ接す。高橋謙三ニ書を与ふ。豊次部長女縁組の事決せしにより内子に祝儀為持四谷へ遣す。佐々木義山身事ニ関し来話。」(ハハオ) 根矢熊吉の書ニ接す。

七日

快晴。根矢熊吉、国井守蔵ニ書状を發す。参校館務を処す。サラセヴホ発直治の郵書ニ接す。児ニ課す。今夜偕樂園ニ二水会あり校友出身代議士悉く出席す。学校の都鄙、校友其他関係者を基礎とし相互保険会社を設立しては奈何との提議を為すものあり、宿題として攻究するに決セリ。」(ハハウ) 但し未だ二水会全体之議に付せしにあらざ。羽田より橋本文三郎刑事一件ニ付云々の談あり。

八日

早朝児を伴ふて宮本に抵り診を請ふ。写真を真嶋信城ニ送る。亦北堂にも同断、且つ要件一二申送る。坂口五峰ニ書を投して事を托す。国井守蔵より来書あり、直ニ答ふ。又根矢熊吉ニ書を投ず。午後より参校館務を処す。

(八九オ) 十二日紅葉館に於て紅葉祭の案内、硯友社より来る。岡田猛熊の書ニ接す。児ニ課す。出版部より半季分配当金百五十円受取。直に田中唯ニ渡す。鈴木浩一ニ対する負債償却ニ充る為也。

九日

真嶋信城、国井守蔵の書ニ接す。松山堂并ニ野村寅次来訪。参校館務を処す。松山堂より古版春画六帖を購ふ。」(八九ウ) (内五帖は湖龍齋画版刻本、一帖は祐信筆版刻本) 価二十八円也。吾軍旅順二〇三高地占拠の結果港内の敵艦を連日砲撃し、幾んど全滅に至らしめたりとの快報伝へらる。換壁録を筆し夜に入る。

十日

陰後雨。高沢喜一郎より帰郷を報し来る。参校館務を処す。千葉鈺ニ托したる物品売却代金若」(九〇オ) 千領掌す。児ニ課す。家弟来訪。長女縁談之件ニ関し云々して去る。在大坂小川為次郎より来信あり。

十一日

日曜。好晴ニ乗じ病児を拉し、新開の濠端線電線ニ試乗

し、神田より新橋、土橋に至り松山堂ニ立寄り帰宅。新野亮太郎来訪、物を贈らる。三木武次身上之ことにつき来訪。国井謙蔵之件ニ付人を本郷宿屋へ遣し其の仕末を「国元」(九〇〇)へ申送る。其磧の世間娘氣質を読み亦換壁録を筆して夜に入る。

十二日

陰後雨。沢本与一、山田穀城の書ニ接す。新潟新聞新年の寄稿を促す也。坪谷水哉より機を九段写真師佐藤へ入門之事ニ付来書あり、直ニ答ふ。参校館務を処す。村上專精と話し、十四日午後佐藤伊三郎を同訪することを約し、佐藤ニ書状を發す。師宣画仙経之事ニ付松山堂「(九一オ)へ書を投す。夜に入り児ニ課す。

十三日

陰後みぞれ降る。参校館務を処す。国井より来書あり。児ニ課す。赤塚政作より越後味噌樽贈らる。夜来降雪あり。

十四日

夜来の降雪積むて寸余ニ及ぶ。本日も終日間断なく降

る。天長節、奥国より「(九一ウ)發せる直治の絵はかき到來す。参校館務を処す。目下入監中之橋本文三郎之為鈴木喜三郎に云々す。岡田猛熊ニ書を投す。午後雪を冒して村上專精と共に佐藤伊三郎を新潟銀行支店に訪ひ女学校資金之事ニつき協議す。夜に入り児ニ課す。

十五日

雪霽、寒氣之一段加ハるを覚ふ。山易扁額之事ニつき五峰より来書あり。額を「(九二オ)白勢春三へ為持遣す。在新潟の尾竹国観、並木寛太郎妻、本田種竹、巽来次郎ニ小箋を贈つて揮毫を托す。新年調製之屏風ニはらんとて也。高橋謙三の書ニ接す。国井より塩引を送り来る。参校館務を処す。長田秋涛ニ書を投す。(西園寺陶庵ニ書を請ふの件)。千葉鉦の書ニ接す。

十六日

雨。在米真嶋仲太郎より二通の来書あり。「(九二ウ)岡田猛熊之書ニ接す。病児を宮本へ遣し診察を乞ふ。胃腸が多兒未だ少しく愈へす云々。参校館務を処す。旗野蓑織来話。本日紅葉館ニ紅葉山人の記念祭あり、行かず。高

井高尚、江部淳夫来訪あり。国井守蔵より為替入書狀、真嶋信城よりも書状来る。

十七日

晴。松山堂来訪。参校館務を処す。並木寛太郎の書ニ接す。直ニ答ふ。(九三オ)今夜家弟長女、下林貞雄と結婚ニ付四時より家弟方ニ至り、七時先方親族と伊勢席方ニ会し宴を張る。林田亀太郎、下林と同郷の關係より来會、滞りなく済み九時過散會セリ。对斎藤訴訟入費(新瀉弁護士へ送る分)五円家弟ニ付す。千葉、新発田銀行、松山堂等の来書ニ接す。

十八日

晴。日曜。丹呉より塩引を送る云々の(九三ウ)書状到来。谷資敬息喬戦死ニ付吊詞を送る。館用にて青地雄太郎を飯田町旅寓ニ訪ふ、不在。松山堂ニ館用之図書を檢す。児ニ課す。佐藤勝三郎より神戸市役所ニ入りたる旨報し来る。青木義彰逝く。

十九日

晴。江部淳夫、池本純吉の書に接す。参校館務を処す。

二十日

晴。丹呉より小包にて塩引鮭到来。実業学校ニ幹事を訪ふて閲覧料ニつき云々す。参校館務を処す。琳琅園ニ若干之図書を購ひ、千葉鉦を訪ふて話す。青木義彰死去ニ付谷中式場まで抵り吊意を表して帰宅す。丸山新十郎、高嶋喜逸来訪あり。夜に入り落後生来訪、史談ニ時を移して去る。

二十一日

快晴。丹呉、国井ニ郵書を發す。小林堅(九四ウ)三を招て館用を処す。病児を伴ふて宮本ニ診察を乞ふ。本日掃煤を行ふ。児美津、漸く快方ニ向ふ。熱海樋口より山芋を贈り来る。坂口五峰ニ書を投ず。不在中沢本与一來訪。実業学校の書ニ接す。

二十二日

晴。本日冬至、凍雲雪を降さんとす。図書館ニ簡して一二の用を弁す。内子と共に日本橋辺ニ歳暮之買物を為(九五オ)す。真嶋両家へ新年床飾二品、丹呉へ魚煎餅、北堂へ烟草、何れも小包にて本日差出す。白勢春三ニ書を

す。坂口より来書あり。田中唯、和泉文三、江部等来訪。真嶋信城より梨子壺函贈らる。高橋謙三の書に接す。夜に入り沢本与一来訪。寺崎広業宛添簡を与ふ。夜来雨あり。

廿三日

晴。参校館務を処す。白勢の答書到る。「(九五ウ) 兩三日来便秘に付下劑を服す。即ち利す。故紙を検して友人之手簡若干を得、静かに読めば往事茫々の夢のことく多少の興趣を覚ふ。即ち若干紙を選むてこれを装演師ニ托す。横巻を作つて存せんと欲する也。」

廿四日

晴。有楽社の安孫子某来訪あり。病児平愈につき携えて上野、浅草辺ニ「(九六オ) 散策し、金田ニ飯して帰宅。」

廿五日

晴。小林堅三来訪。午後内子と共に日本橋辺ニ散策し物を購ふ。不在中下林貞雄来訪、物を贈らる。「古蹟の筆蹟」
廿六日
晴。参校館務を処す。幹事ニ書を投して事を托す。根矢

熊吉之書ニ接す。謙蔵之事ニ関す。直ニ国井ニ転送す。「(九六ウ) 在新潟の尾竹国観ニ書を投して揮毫を促す。江部淳夫来訪、清松子の近況を報す。曰く、熱漸く退き元気回復セリと。真嶋桂次郎より来状あり、塩漬肉を送る云々。

廿七日

晴。真嶋両家の書状ニ接す。真嶋本家より歳暮として鮭塩引到来。内子を四谷へ遣す。贈答ニ忙ハシ。「(九七オ)

廿八日

晴。内子と日蔭町ニ赴き児等之為物を購ふ。橋本文三郎、早川早治来訪、物を贈らる。本日より日本医学史の閲覧を始む。昨日に引つゞき贈答其他の俗事ニ忙殺セラる。

廿九日

朝来門生等来つて餅つきの手伝をなす。北堂より来書あり、隠宅普請出来ニ付廿九日親族を会して祝宴を開き、来年早「(九七ウ) 々移転之趣報知あり。帆足聴松より帰京を報じ来る。真嶋へ塩引之礼状を差出す。第一回国庫債

本券并ニ利子受取之為日本銀行に抵り事済む。学校より
新刊書一部おくり来る。田原栄来話。夜に入り家弟来
訪。桑田春風の書に接す。雨あり。二龍山占領の報到
る。

三十日

晴。今朝東郷提督凱旋帰京す。児機を佐藤伊左衛門旅館
へ歳暮の品を「(九八〇) 齎らし遣す。真嶋信城より来信あ
り。夜来風雨あり。

三十一日

晴。北堂、坂口、千葉等より来書あり。「(九八〇) 齎らし遣す。
明治三十七年はこれにて尽く。本年特記を要するは日
露の開戦なり。皇軍の連捷なり。これ国家之為特ニ祝
すべしとなす。

一身は不相変碌々たり。幸にして宿痼軽快也。北堂は
西条に居を卜せられ、余は十月頃より眼鏡を用ひ始
め、漸く老鏡ニ達せるを覚ふ。債鬼四囲の間に多少の
貯金を為す。これ瑣事と虽も余の既往に於て曾て無か

かりし事、特記を「(九九〇) 要す。並出す。第一回編輯期

明治三十七年十二月三十一日夜誌「(九九〇) 齎らし遣す。

廿六日

晴。今朝東郷提督凱旋帰京す。児機を佐藤伊左衛門旅館
へ歳暮の品を「(九八〇) 齎らし遣す。真嶋信城より来信あ
り。夜来風雨あり。

廿八日

晴。北堂、坂口、千葉等より来書あり。「(九八〇) 齎らし遣す。
明治三十七年はこれにて尽く。本年特記を要するは日
露の開戦なり。皇軍の連捷なり。これ国家之為特ニ祝
すべしとなす。

廿九日

晴。北堂、坂口、千葉等より来書あり。「(九八〇) 齎らし遣す。
明治三十七年はこれにて尽く。本年特記を要するは日
露の開戦なり。皇軍の連捷なり。これ国家之為特ニ祝
すべしとなす。

三十日

晴。北堂、坂口、千葉等より来書あり。「(九八〇) 齎らし遣す。
明治三十七年はこれにて尽く。本年特記を要するは日
露の開戦なり。皇軍の連捷なり。これ国家之為特ニ祝
すべしとなす。